

カムチャツカ半島南部出土内耳土器とその千島アイヌ史上の意義

高瀬 克範

【要 旨】 本研究の目的は、内耳土器の年代と分布を手がかりとして、カムチャツカ半島南部における千島アイヌとその祖先集団であるクリルの活動の変遷を解明することにある。この問題を考察するうえできわめて重要な資料であるにもかかわらず、これまで図面・写真等がほとんど公開されてこなかったカムチャツカ地方統合博物館保管の A. K. ポノマレンコ・コレクションを中心とする土器資料の再検討により、以下の点を明らかにした。

- 1) カムチャツカ半島南部から出土する土器は、基本的にすべて内耳土器である。
- 2) 内耳土器の型式学的特徴と分布から、その使用者は 15 世紀後半～17 世紀にはロパトカ岬からシプンスキー半島北側までのひろい範囲を活動の舞台としていたが、18 世紀以降にその範囲が縮小し半島南端部（ロパトカ岬～ヴェストニク湾）に限定されるようになる。19 世紀以降はカムチャツカ半島自体がほとんど利用されなくなるほか、土器の製作・利用も衰退する。
- 3) 内耳土器は、ナルィチェヴォ文化を構成する一要素である。ナルィチェヴォ文化は、ヂコフ（Диков 1979）が設定し、ヂコヴァ（Дикова 1983）、ポノマレンコ（Пономаренко 1985）が具体化した古イテリメン文化のなかのナルィチェヴォ類型・ナルィチェヴォ期の物質文化複合の内容をそのまま流用したものである。ただし、古イテリメン文化の一部に位置づけるのは不適切であるため、それとは独立した考古学的文化として取り扱う。
- 4) カムチャツカ半島東南部では上位からナルィチェヴォ文化期文化層 — 黒褐色・暗褐色砂質シルト — KS1（ca.1800yBP）— タリヤ文化期文化層という層序のパターンがひろく認められる。タリヤ文化がクスダーチ山の噴火によって大きな打撃を受けたのち、ほとんど人類が利用していなかった土地へナルィチェヴォ文化の担い手が進出した可能性がある。
- 5) クリル／千島アイヌの大部分がナルィチェヴォ文化の担い手によってしめられていることを前提にすると、クリル／千島アイヌの居住域は 18 世紀において急速に縮小したと考えられる。その背景には、資源・土地利用方式の変化といった内的要因と、ロシア人のカムチャツカ半島への本格的な進出をはじめとする外的要因が想定される。

キーワード：カムチャツカ半島、千島列島、内耳土器、ナルィチェヴォ文化、千島アイヌ

1. 目的

本研究の目的は、内耳土器の特徴とその分布を手がかりとして、カムチャツカ半島における千島アイヌとその祖先集団と目されるクリルの活動変遷を解明することにある。

本稿でおもに注目するのは、カムチャツカ地方統合博物館に保管されている A. K. ポノマレンコ・コレク

ションである。量的な観点からみても、カヴァーしている地理的範囲の広さからみても、このコレクションはカムチャツカ半島におけるもっとも充実した考古資料体のひとつである。しかも、1970 年代～2000 年代の 30 年近くにわたる継続的な調査の成果であり、この点において特定の遺跡・地域を短期間で大規模・集中的に調査した結果えられた N. N. ゼコフ、T. M. ゼ

受付：2014 年 11 月 27 日，受理：2015 年 2 月 23 日

*北海道大学大学院文学研究科北方文化論講座 〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 丁目 E-mail : takase@let.hokudai.ac.jp

表 1 カムチャツカ半島南部における土器その他の遺物の出土遺跡（+は該当を意味する）（Пономаренко 1993）

No.	遺 跡	土器と金属製の尖 頭器がついた銚先	土 器 片	内耳を有す る土器片	玉 ・ 鉄 器
1	トリ・セストルイ I (Три Сестры-I, Tri Sestry-I)	+	+	+	
2	トリ・セストルイ II (Три Сестры- II, Tri Sestry-II)	+			
3	ベズイミヤンナヤ (Безымьянныя, Bezymjannja)	+			
4	ウシャトナヤ (Ушатная, Ushatnaja)	+			
5	ムイソヴォイ (Мысовой, Mysovoi)	+			+
6	パヴォロトナヤ (Поворотная, Povorotnaja)	+			
7	ウタシュド I (Уташуд-I, Utashud-I)	+	+		+
8	ホドウトカ I (Холутка-I, Khodutka-I)	+			
9	ホドウトカ II (Холутка-II, Khodutka-II)	+			
10	ユシンスカヤ (Юшинская, Yushinskaja)	+			
11	コルネフスカヤ (Корневская, Kornevskaja)	+			
12	アサチャ (Асача, Asacha)	+			
13	ベレゾーヴァヤ I (Березовая-I, Berezovaja-I)	+			
14	ベレゾーヴァヤ II (Березовая- II, Berezovaja-II)	+			
15	ベレゾーヴァヤ III (Березовая-III, Berezovaja-III)	+			
16	リストヴェンニツチナヤ I (Лиственничная-I, Listvennichinaja-I)	+			
17	リストヴェンニツチナヤ III (Лиственничная-III, Listvennichinaja-III)	+			
18	チハエ I (Тихое-I, Tikhoe-I)	+			
19	チハエ II (Тихое-II, Tikhoe-II)	+			
20	ルースカヤ (Русская, Russkaja)	+			
21	ファリシヴァヤ (Фальшивая, Fal'shivaja)	+			
22	ジローヴァヤ (Жирова, Zhirovaja)	+			
23	ヴァイヴァイチク (Вайвайчик, Vaivaichik)	+			
24	バリシャヤ・サランナヤ (Большая Саранная, Bol'shaja Sarannaja)	+	+	+	
25	バリショイ・ヴィリュイ I (Большой Виллюй-I, Bol'shoi Vilyui-I)	+			
26	バリショイ・ヴィリュイ II (Большой Виллюй-II, Bol'shoi Vilyui-II)	+		+	
27	バリショイ・ヴィリュイ川 II (р. Большой Виллюй-II, Bol'shoi Vilyui River-I)	+	+		
28	バリショイ・ヴィリュイ川 III (р. Большой Виллюй-III, Bol'shoi Vilyui River-I)	+			
29	トレーチャ・レーチカ I (Третья Речка-I, Tret'ja Rechka)	+			
30	リャブーヒナ川河口 (Рябухина, Rjabukhina)		+		

* 29 と 30 はカムチャツカ半島西海岸の遺跡である。

コヴァのコレクションとは異なる意義を有している。

しかしながら、ポノマレンコ・コレクションの遺物、とりわけ土器に関しては資料の図面・写真がほとんど公表されてこなかったため、ポノマレンコの著作の記載から多数の資料が存在することが予測されながらも型式論的な観点から内耳土器の詳細な検討を行うことができなかった。たとえば、カムチャツカ半島南部の調査報告（Пономаренко 1993）においては、土器および金属製の尖頭器をとまなう銚先(キテと思われる)が出土した遺跡として表 1 にしめした 29 遺跡が列挙されている。このほか、土器片が出土した遺跡として 5 遺跡、内耳のついた土器片が出土した遺跡として 3 遺跡、「南京玉」と鉄器が出土した遺跡として 2 遺跡も本文では紹介されている。しかし、土器は 3 遺跡から出土した 18 個の破片が図示されているのみで、しかもそのうち 16 個は断面だけの図示にとどまっているのである。このほかにも、野村・杉浦(2000b)がトリ・

セストルイ I 遺跡とバリシャヤ・サランナヤ遺跡出土土器の一部の資料について写真を提示しているが、これをくわえてもポノマレンコ・コレクション中の土器資料の全体像を理解することは到底できない。

本稿では、ポノマレンコ・コレクション中の土器にくわえて、筆者らの 2012, 2014 年の野外調査によってえられた土器を検討することにより¹⁾、まずカムチャツカ半島南部における内耳土器以外の土器の存否問題について明確な解答をえる。ついで、クリル湖畔における調査成果にもとづいて構築された内耳土器の編年をふまえて (Takase 2013)、カムチャツカ半島南部および北千島における内耳土器の年代・分布を評価しなおし、それが千島アイヌの歴史において含意する意義について考古学の立場から論じることとする。

2. 内耳土器の型式論的特徴

現在、カムチャツカ地方統合博物館の考古資料は、

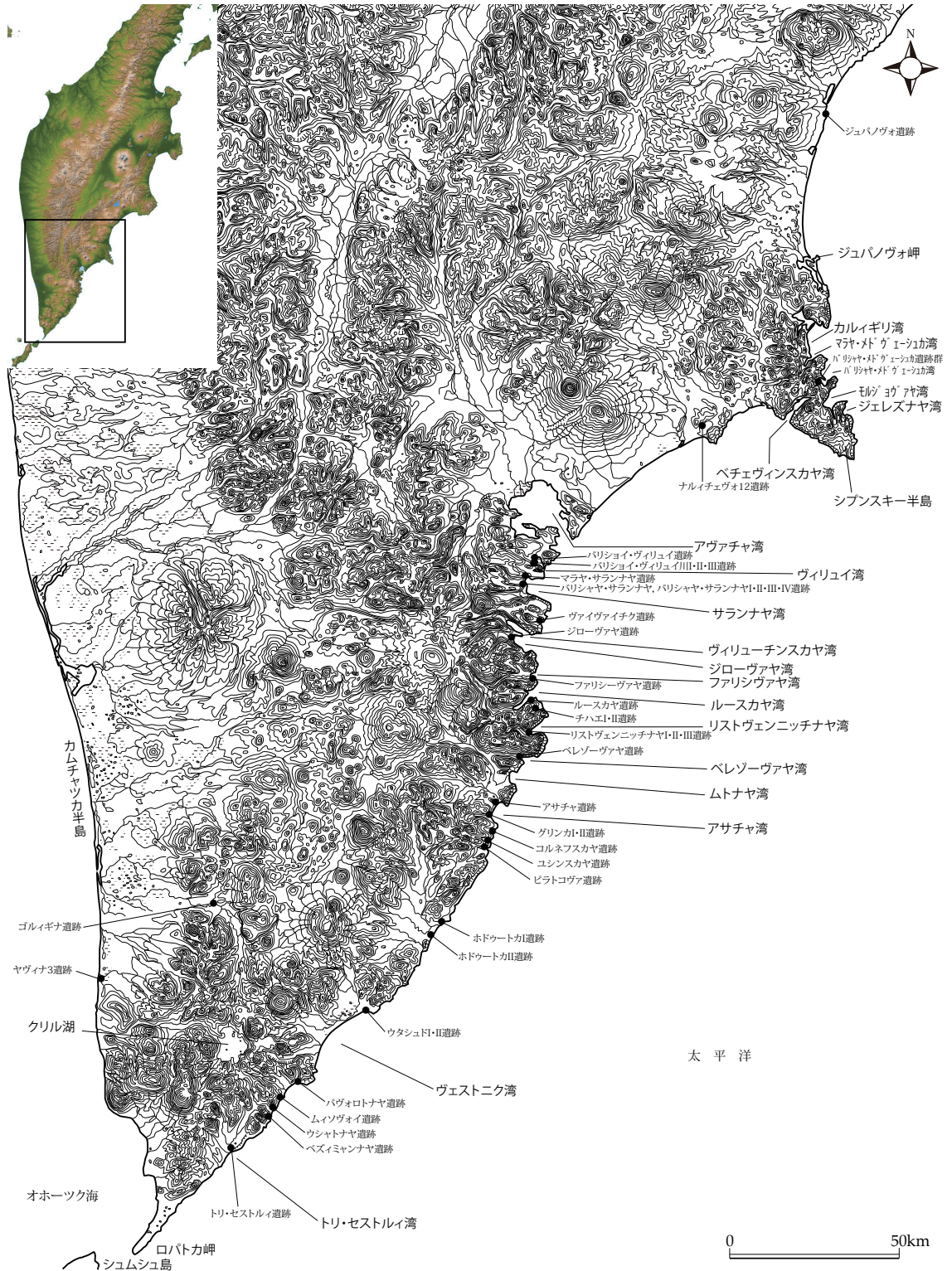


図1 カムチャツカ半島南部の地形と検討対象遺跡の位置

収蔵庫内の施錠された「考古学」資料棚の内部に、木製標本箱におさめられた状態で保管されている。筆者は、これらすべての標本箱内部を瞥見してカムチャツカ半島南部から出土した全土器資料をぬきだし、それらをすべて観察・図化した。以下に、その特徴について、おもに型式論的な観点から記載する。ポノマレンコが土器の出土を報告している遺跡については基本的にすべての遺跡で土器資料を確認することができたが、バリショイ・ヴィリュイ川 (р. Большой Вилуй) 遺跡の資料だけは発見することができなかった (Пономаренко 1993)。すでに満杯状態となっている現在の「考古学」棚以外の棚に収蔵されている可能性もあるため、今後、あらためて調査する機会をえたいと考えている。また、報告されている土器の出土点数と実物の点数が合致しない事例や、図示されている土器の実物が確認できないなど個別の問題も散見される。それらについては、以下の遺跡ごとの記載において可能なかぎり言及する。

(1) ゴルイギナ (Горыгина) 遺跡

半島西海岸では内耳土器の北限となる遺跡である。ポノマレンコ (Пономаренко 1993:50) による報告では、土器が7点出土したことが記されているが、図示はされていない。コレクション中には9点の土器片が確認され、うち4点が口縁部破片である。図 2:1 は、推定口径が 30 ~ 40cm ほどになる大きな内耳土器片である。内耳の孔には、1本のたこ糸が通された状態で保管されている。3点の土器片が接合するため、外面側の拓本では接合状態で復元してある (実物資料の接合は行っていない)。器壁は直線的に立ち上がり、内耳の上部に突起がある。礫を多く含む胎土が用いられており、焼成は不良である。外面には広い範囲に炭化物が付着している。内耳の接着位置の外面側には、円形の盛り上がりが認められる。内耳の長さは 5.5cm、孔の径は 1.3cm、器壁厚は 0.7cm である。そのほかの胴部破片の胎土・焼成・炭化物付着状況も同様で、器壁は 0.6 ~ 0.8cm 程度である (図 2:2~7)。図 2:2 の口縁部破片から、断面がカマボコ状となる粘土接合方法が看取される。

(2) ヤヴィナ 3 (Явино-3) 遺跡

ヤヴィナ遺跡群はデコヴァ (Дикова 1983) によって報告されており、ヤヴィナ 1 ~ 9 遺跡に分類されている。しかし、平面図が精確ではないうえに現地の地形改変も著しいため、各遺跡の位置を特定するのは容易ではない。このような事情のため、筆者らが 2012

年にこの遺跡群を踏査した際に発見した骨角製銚頭は、デコヴァの報告には掲載されていない新たな遺跡から採集したものと判断し、「ヤヴィナ 10 遺跡」出土と報告した (Takase 2013, Fig.3:35)。しかし、その後の位置の検討から、その遺跡はデコヴァ (Дикова 1983) のいうヤヴィナ 3 遺跡に対比できる可能性がもっとも高いと考えるにいたった。ここに訂正する。なお、銚頭は形態・製作技術ともに、北千島から出土する事例 (e.g., 馬場 1937) ときわめて類似性が高いものである。

図 2:8 に図示したのは、やはり 2012 年の筆者らの分布調査においてヤヴィナ 3 遺跡で採集された口縁部破片 1 点である。口縁部がゆるやかに外面に張り出しているが、内面の溝はほとんど確認できず、消失しかかっていると判断される。器壁は 0.8cm と比較的うすい。外面下部に指の押捺によって形成されたと考えられる凹みが一箇所みとめられる。器面上に連続的に配置されるものかどうかはこの破片からだけでは不明であるが、文様の可能性ものこされる。

(3) ロパトカ岬 (м. Лопатка) 遺跡群

1990 年のポノマレンコによる調査資料である。報告 (Пономаренко 1993:31) ではごく簡単に記述されるにとどまっているが、ロパトカ岬周辺の 3 地点で遺物が収集されたことがわかる。残念ながら、デコヴァ (Дикова 1983) が調査した各遺跡との関係は詳らかではない。報告では土器についての記載はないが、このときの調査でえられたと思われる土器片 10 点が保管されている。すべて焼成が非常に悪く、同一個体の可能性が高い土器片である。図 2:10 は口縁部に近い 2 点の破片が接合したもので、図面上では接合状態で表現してある。口縁部内面には明確な溝が作出されており、図 2:12 の破片内面にも同様の溝がみとめられる。図 2:9 は口縁部破片、図 2:11, 13, 15 は底部およびそれにきわめて近い位置の破片、それ以外の図 2:14, 16, 17 が胴部破片である。焼成が不良であることも関係してか、外面側が剥落しているものが多い。

(4) トリ・セストリイ (Три Сестры-1) 遺跡

報告 (Пономаренко 1993:30) では 53 点の土器片が出土したと記載されているが、45 点の土器片が確認された。一遺跡からの土器出土数は群を抜いて多く、少なくとも 97 棟の竪穴住居が確認されている点や広大な遺跡の面積からみても、カムチャツカ半島における内耳土器使用者の拠点的な集落であった蓋然性が高

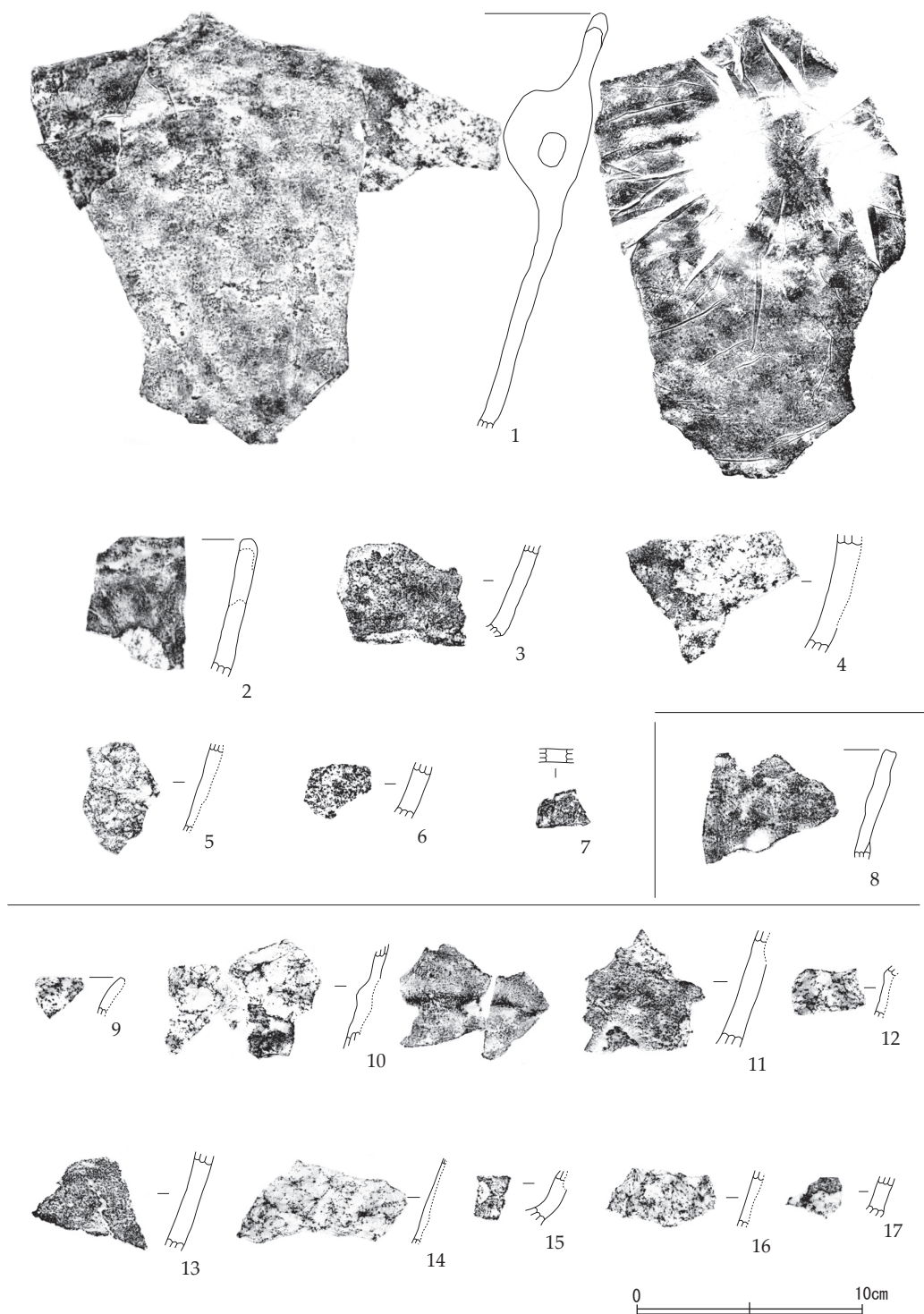


図2 カムチャツカ半島南部出土土器 (1) [1-7: ゴリギナ遺跡, 8: ヤヴィナ3 遺跡, 9-17: ロパトカ岬遺跡群]

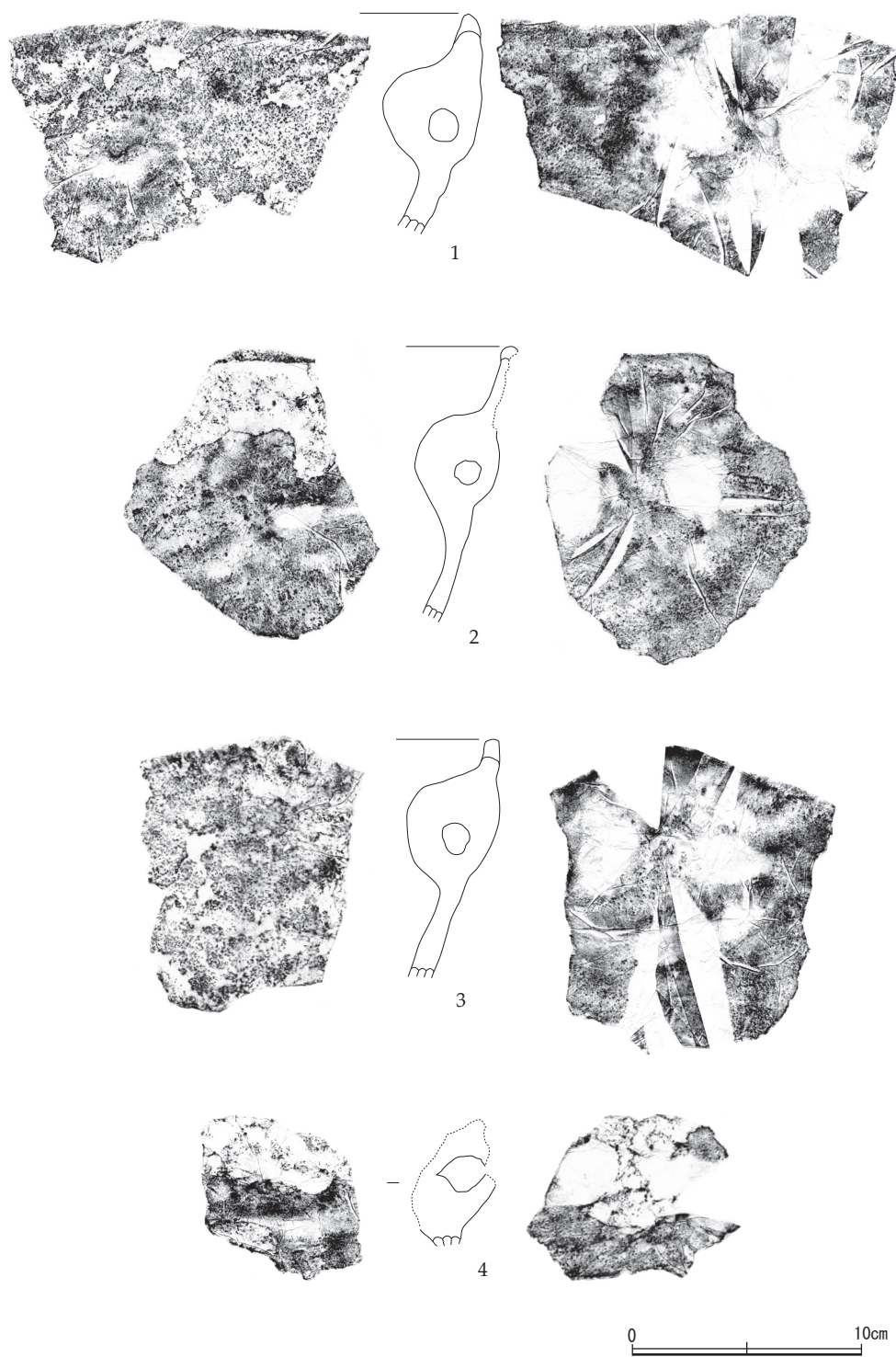


図3 カムチャツカ半島南部出土土器(2) [1-4: トリ・セストルイ遺跡]

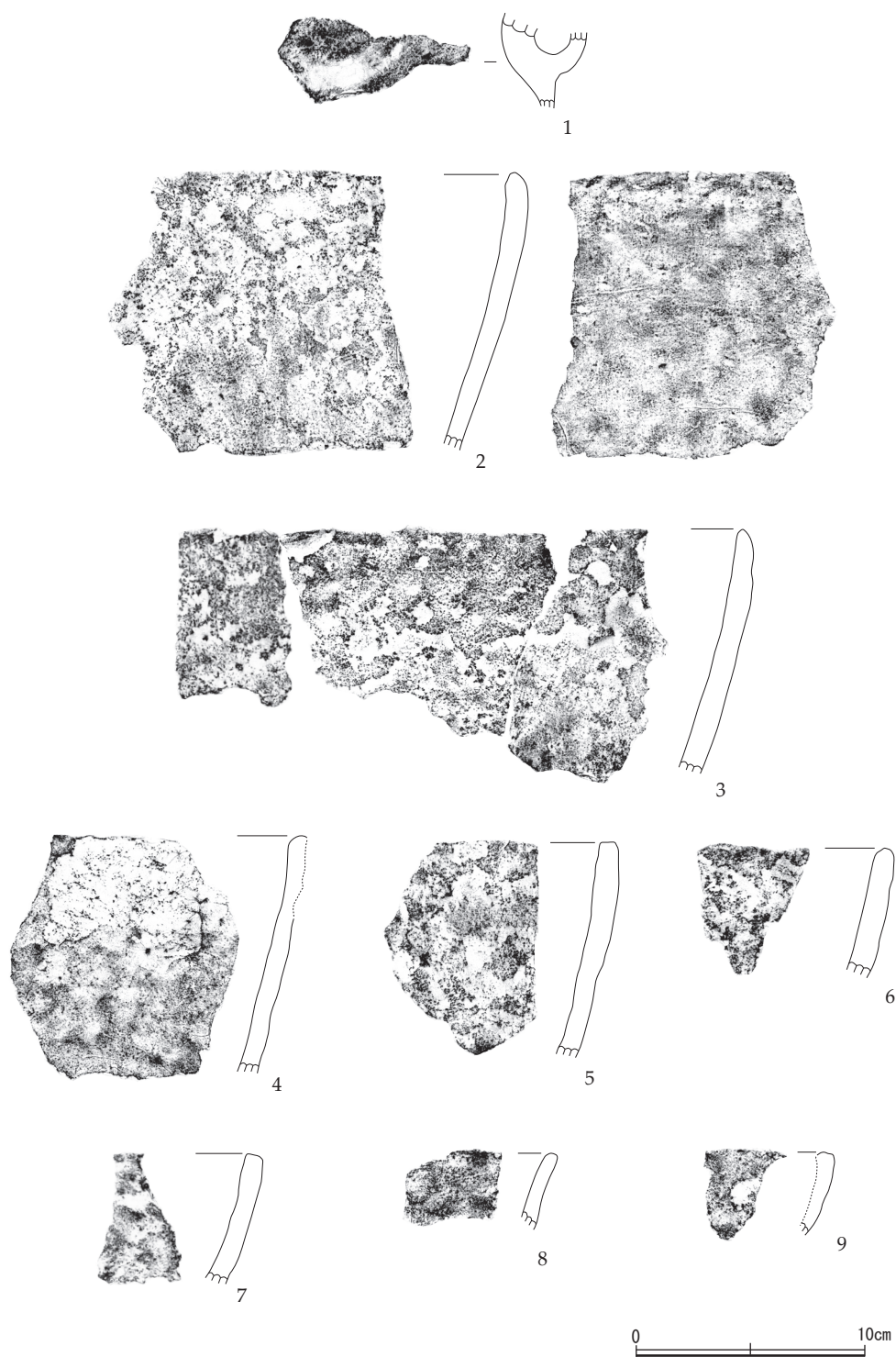


図4 カムチャツカ半島南部出土土器 (3) [1-9: トリ・セストルイ遺跡]

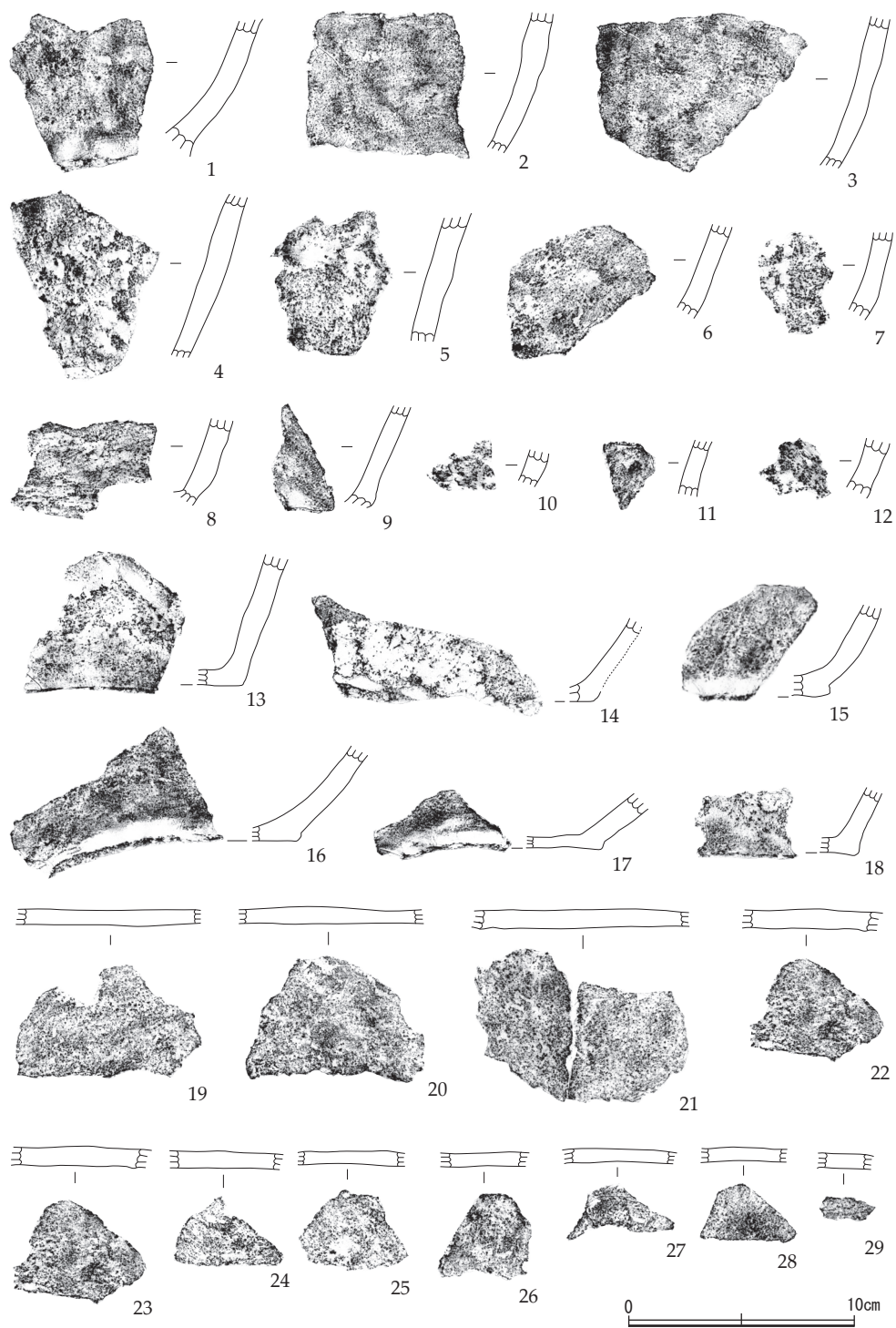


図5 カムチャツカ半島南部出土土器 (4) [1-29: トリ・セストルイ遺跡]

い。筆者は、占守島の別飛・潮見川地区の遺跡群にならぶ重要性をもつ遺跡であると予測しており、なおかつそうした拠点性の高い遺跡がロバトカ岬に近い位置に形成されている点も千島アイヌの土地・資源利用にとって非常に示唆的であると考えている。

内耳をもつ口縁部およびそれに近い位置の破片は、図 3:1~4 および図 4:1 の 5 点である。報告 (ibid.) の図 9:12 に対比できる内耳土器をもつ破片はこのなかに含まれていない。そのほか、11 点の土器片については断面のみが図示されているため、現存する資料との正確な対比が難しい。図 3:1 は、推定口径 34cm の内耳をとともなう口縁部破片である。内耳部分を頂点とするゆるやかな突起がみとめられる。内耳の長さ 6.0cm、孔の径 1.5cm、器壁厚 1.2 ~ 1.4cm である。口縁内面に溝は作出されていない。図 3:2 も内耳を有する口縁部破片であるが、外面の一部が剥落している。内耳の長さは 6.5cm、孔の径は 1.2cm、器壁厚は 0.7cm である。図 3:3 もやはり内耳を有する口縁部破片であり、ゆるやかな突起が認められる。内耳接着部分の外面側は瘤状に盛り上がる。内耳の長さは 6.0cm、孔の径は 1.5cm、器壁厚は 1.1cm である。図 3:4、図 4:1 はともに内耳部分の破片で、内耳が付されている部分の外面の盛り上がりが顕著である。図 4:2、および 3 点の破片が接合する図 4:3、図 4:4~9 は、すべて口縁部破片である。外面に炭化物が付着しているものが多く、口縁内面の溝は図 4:4 で痕跡的な凹みとしてかろうじて確認できるほかは、いずれも明確には作出されていない。図 4:2 および図 4:3 は同一個体の可能性があり、推定口径は 32cm である。図 5:1~12 は胴部破片、図 5:13~29 は底部破片である。文様をもつものではなく、底部破片はすべて平底である。

なお、図 3:1 および 2、図 4:3 および 4 の 4 点は、野村・杉浦 (2000b) が写真で提示している破片のなかに認められる。この写真のなかにはそれ以外の破片も認められるが、本稿で提示した図面との明確な対比は難しいため、ここではこれ以上ふみこまないでおく。

(5) ウタシュド I (Уташуд-I) 遺跡

報告では 1 点の土器断面が図示されるにとどまることが (Пономаренко 1993:64)、12 点の土器片が保管されている。うち 7 点が口縁部およびそれに近い位置の破片である。沢地形をはさんで隣接するウタシュド II 遺跡とあわせると規模の大きな遺跡になると予想されるが、ウタシュド II 遺跡は軍関係の活動によりすでに大部分が消滅している (A. V. プタシンスキー私信

2014)。

図 6:1 は口唇部を欠くため厳密には口縁部破片とはいえないが、内耳のつく破片である。破片全体が強度に摩耗しており、おそらく水中で採集されたか地表に露出していた時期が長かったものと思われる。内耳接着部分の外面側は、明確に盛り上がっている。内耳の長さは 4.5cm、孔の径は 1.4cm、器壁厚は 1.3cm である。図 6:2 も口唇部を欠いているが、内耳部分の破片である。外面側はやはり大きく低い瘤状に盛り上がっている。長さ 6.0cm、孔の径 1.8cm の大きな内耳がみられ、器壁厚は 1.4 ~ 1.7cm である。図 6:3 および 4 は内耳のない口縁部破片であるが、3 の内面の一部には内耳が剥落した痕跡がわずかにみとめられる。同一個体ではないと考えられるが、どちらも外面に横位一列の刺突文がめぐっている。図 6:3 の内面には、外面からの刺突文の影響により形成された突瘤状の盛り上がりも認められる。両者の外面には炭化物が厚く付着しており、刺突文の内部も炭化物によって覆われているため原体の形状を詳しく読みとることは難しい。図 6:5 は口縁部破片で、やはり外面に厚く炭化物が付着している。図 6:6 も口縁部破片で、外面に広く炭化物が付着している。口縁部断面が外側にやや丸みをおびて張り出しており、おそらく内面に幅広の溝が作出されていると考えられる。図 6:7 は口縁部に近い位置の破片であり、内面に溝が作出されていることがみてとれる。これら口縁部およびそれに近い位置の胴部破片の器壁厚は、1.0 ~ 1.3cm 程度である。その他の胴部・底部破片は、器壁が 0.8cm 程度で薄く丁寧なつくりのもの (図 6:11, 12)、器壁が 1.0cm 以上で表面の凹凸が激しい粗雑なつくりのものの両者がみとめられる (図 6:8~10)。

(6) バリシャヤ・サランナヤ (Большая Саранная) 遺跡

1990 年のポノマレンコ (Пономаренко 1993) による調査により、内耳土器片が出土した遺跡である。当時、地表面で確認できた竪穴住居跡はすでになく、現代の建物や土坑のあいだに設定されたトレンチの東南部から数点の内耳土器片が出土したことが報じられている (ibid.:7)。筆者らが分布調査を実施した 2014 年の時点では、漁業関連施設の建設などによる遺跡破壊がさらに進行しており、タリヤ文化期の文化層は一部で残存していたが、その上位の内耳土器を包含する文化層はまったく保存されていなかった。こうした状況を確認する過程で掘削した現代の攪乱層のなかから、

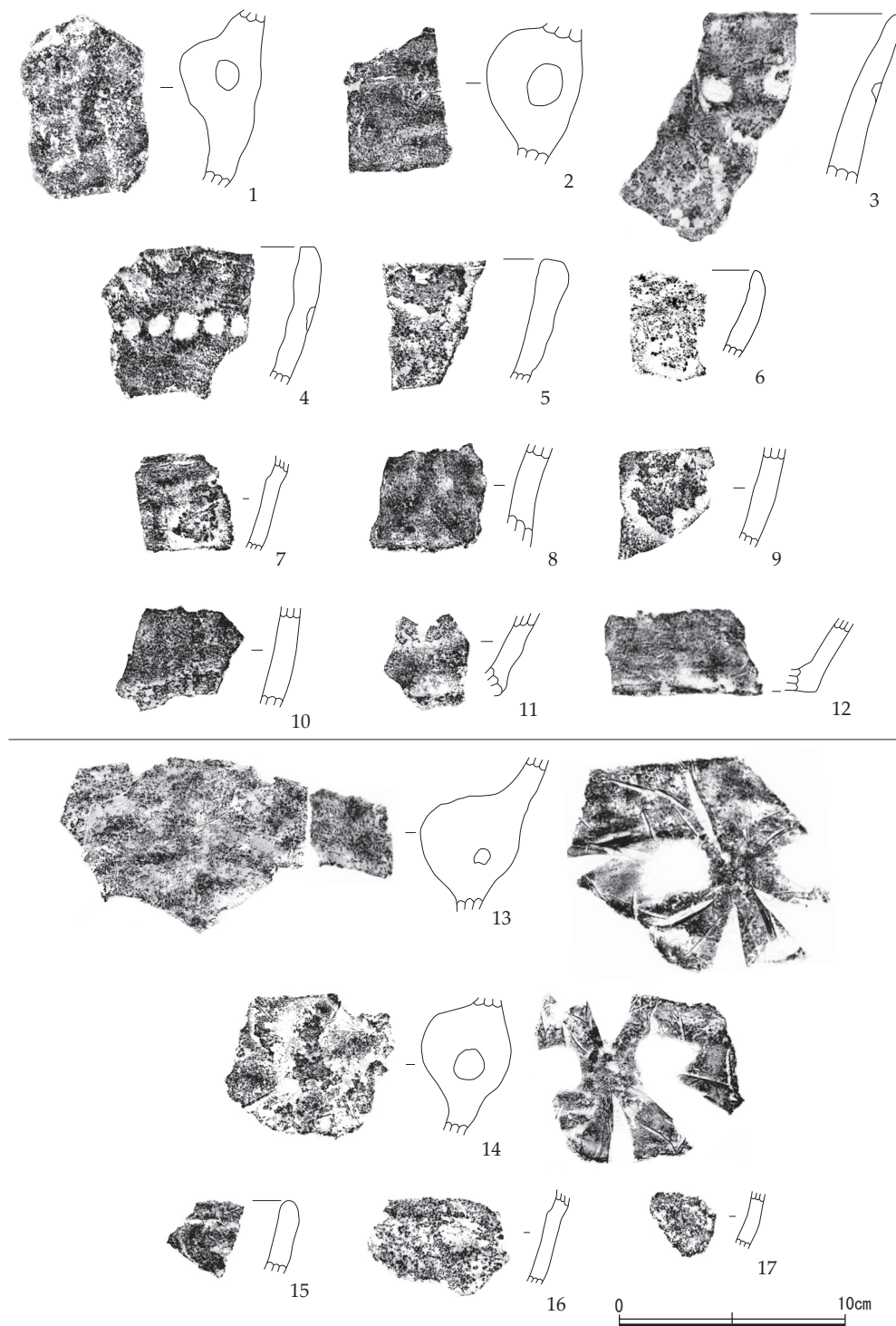


図6 カムチャツカ半島南部出土土器 (5) [1-12: ウタシュドI遺跡, 13-17: バリシャヤ・サランナヤ遺跡]

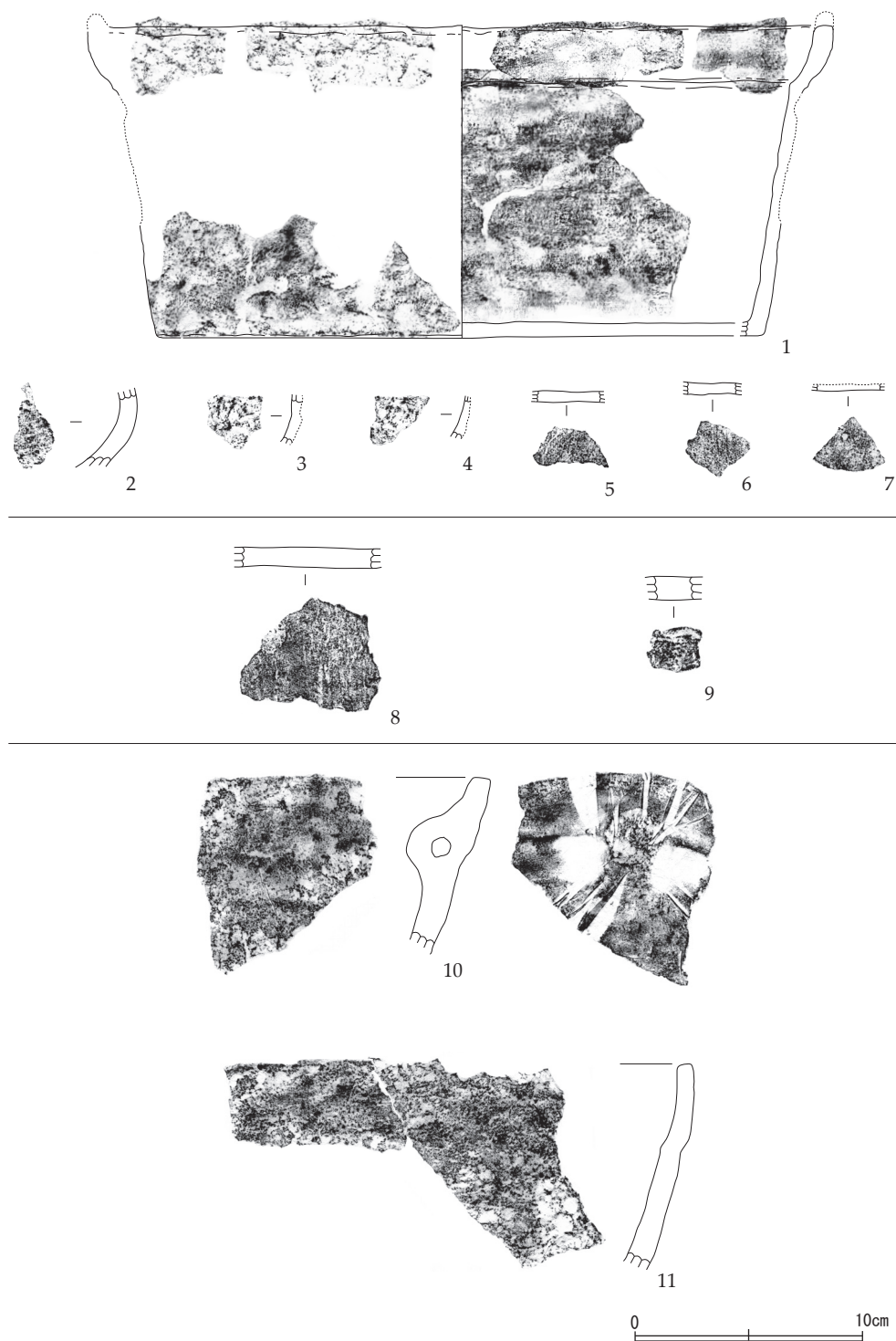


図7 カムチャツカ半島南部出土土器 (6) [1-7: パリシャヤ・サランナヤ遺跡, 8・9: パリシャヤ・サランナヤII 遺跡, 10・11: ナルイ
チェヴォ 12 遺跡]

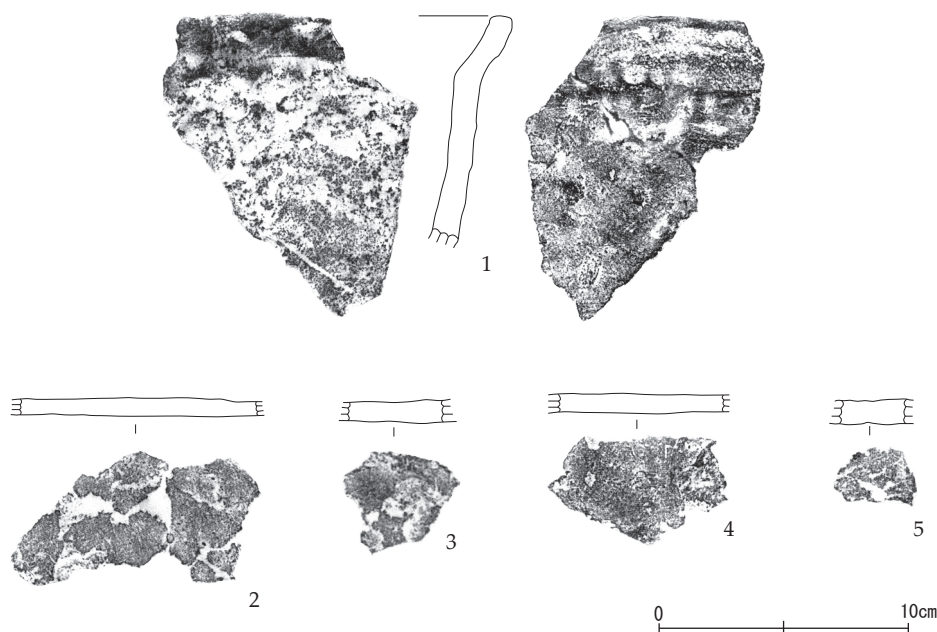


図8 カムチャツカ半島南部出土土器 (7) [1-5:バリシャヤ・メドヴェーシユカ遺跡群]

同一個体と思われる内耳土器片が検出された。本稿ではこの資料についてもとりあげる。

図 6:13 は内耳をとまなう口縁部破片で、ポノマレンコ (ibid.) 報告における図 9:17 の土器片に比定できる資料である。この破片にはべつの 2 個の破片が接合するため、図 6:13 の外面側の拓本は計 3 点の土器片を合成して作成してある。内耳が付されている部分の外面側に盛り上がり確認できるが、口縁部外面全体が外側に張り出す段は明確には確認できない。内面には、内耳の左右に浅く幅の広い溝が作出されている。内耳の長さは 6.0cm、孔の径は 0.6cm、器壁厚は 1.0 ~ 1.2cm である。口唇部を欠いているが、図 6:14 も内耳をもつ破片である。外面側の盛り上がりが顕著であるものの、外面に段はなく、内面の溝も明確ではない。内耳の長さは 5.5cm、孔の径は 1.2cm、器壁厚は 1.1 ~ 1.2cm である。図 6:15 は内耳のない口縁部破片で、外面の段、内面の溝はなく、器壁は直線的に立ち上がる。図 6:16 は胴部破片ではあるが、内面の上部に溝の下端がみつめられるため、比較的口縁部に近い位置の破片であることは間違いない。図 6:17 は胴部破片である。図 6:15~17 の器壁厚は、0.6 ~ 1.0cm である。なお、図 6:13 および 14 は野村・杉浦 (2000b) において写真が提示されている内耳を有する破片であると考えられる。

2014 年の筆者らの試掘調査において、現代の攪乱

層から出土した土器片は、接合したものを 1 点とかざえると全部で 9 点である。図 7:1 は 3 点の土器片が接合する推定口径 32cm、推定底径 26cm と考えられる内耳土器片である。底部は平底で、器壁はかなり大きな角度でたちあがる。外面は剥落している部分が多いが、口縁部は外側に段をもって張り出しており、口縁内面には浅く幅の広い溝が明確に作出されている。突起全体が残存しているわけではないが、口縁部の残存部分から判断して低い突起が付されていたと考えられる。そのほかの破片 (図 7:2~7) は、図 7:1 とはべつの個体の可能性もある。図 7:2 は口縁部に近い破片と考えられ、内耳下端の盛り上がりかわずかに認められる。図 7:3 および 4 は、外面がともに剥落しているが口縁部に近い位置の破片で、内面が湾曲しており溝の一部であると考えられる。図 7:5~7 はすべて平底の底部破片と考えられる。

(7) バリシャヤ・サランナヤ II (Большая Саранная-II) 遺跡

筆者らによる分布調査 (2014 年) であらたに発見された遺跡のひとつである。試掘により 2 片の内耳土器片が出土した (図 7:8, 9)。いずれも平底の底部破片で、内面側に炭化物が付着している。

(8) ナルィチェヴォ 12 (Налычево-12) 遺跡

ナルィチェヴォ湖の北岸に位置する遺跡である。ポノマレンコ (Пономаренко 2000:19) によって遺跡の位置は地図上に記入されているが、同報告中ではナルィチェヴォ (・ニクリスコエ) 期の遺跡・遺物については別途報告するとされていることから (ibid.: 24), 遺跡の内容や出土遺物に関する詳しい記述はみられない。しかし管見のかぎり、その後も調査の詳しい成果は明らかにされていない。

現在、すべて同一個体であると考えられる3点の土器片が保管されており、うち2点が口縁部破片である。のこり1点の胴部破片も、口縁部破片に接合する。図7:10は内耳を有する口縁部破片で、やや不明瞭ではあるが口縁部外面が段をもち外側に張り出している。内面には、内耳から横に展開する浅く幅の広い溝が明確に作り出されている。内耳のサイズは、長さ3.0cm、孔径6mmと比較的小さい。器壁厚は、1.2cm程度である。2点の破片が接合している図7:11は、内面に明確な溝を有し、この溝が口縁部内面の全体にわたって作出されていることがわかる。

(9) バリシャヤ・メドヴェーシュカ (Большая Медвежка) 遺跡群

ポノマレンコ (Пономаренко 1985, 図54) による報告で図示されているバリシャヤ・メドヴェーシュカ I 遺跡出土の復元個体は収蔵庫内にはみられず、べつの個体と考えられる土器片が保管されていた。カムチャツカ地方統合博物館の常設展示に展示されている内耳土器はデコヴァが発掘したアンドリアノフカ遺跡の復元個体 (Дикова 1983, 図41) のみであるため、展示室にある可能性も考えにくい。資料箱に入っていたメモには「バリシャヤ・メドヴェーシュカ 75」としか書かれておらず、バリシャヤ・メドヴェーシュカ I-III 遺跡のうちどの遺跡から出土したのかは厳密には不明である。しかしながら、いまのところ内耳土器の分布の北限地域から出土した事例のひとつであることはまちがいない。図8:1は内耳を伴わない口縁部破片で、外面はひろく炭化付着物に覆われている。口縁部は外側に張り出しているが、段の形成はやや不明瞭である。しかし、口縁部内面の溝は明確に、かつ丁寧に作出されている。器壁厚は、1.0cmである。図8:2-5はすべて平坦な底部の破片である。器壁厚は0.7~1.0cmである。

これまで図示・記載されてきたすべての資料を確認できたわけではないが、以上が現在カムチャツカ地方統合博物館の収蔵庫の考古学棚に保管されている南カ

ムチャツカ出土のすべての土器資料 (胴部・底部をふくむ) である。

3. 考察

(1) 内耳土器以外の土器の存否問題

カムチャツカ半島の北半部では土器が多数出土することが知られている。それらは古コリャーク文化 (Васильевский 1961, 1971) の土器として一括されて理解されることが多いが、筆者は自らの調査結果にもとづいて、オホーツク海北岸から出土する古コリャーク文化の土器とはかなり異なる内容をもっていることを指摘した。そのうえで、カヴラン類型、イヴァシュカ類型、浮文をもつ一群、および方形圧痕をもつ一群の4類型に整理し、それぞれの年代を明らかにしている (Takase 2014)。

一方、半島南部では内耳土器が出土することが知られてきたが、これまで土器が出土したとされる遺跡について筆者は、提示された図面によって内耳土器であることが追認できる場合をのぞいて確実な内耳土器出土事例として積極的に取り扱ってこなかった。その理由はおもにふたつある。第1は、カムチャツカ半島南部には内耳土器以外の土器が分布する可能性もあると予想していたため、胴部や底部の土器片だけでは他の時期の土器 (たとえばオホーツク文化の土器など) との区別が難しいと考えていたからである。また、たとえ耳のついた口縁部破片が発見されていたとしても、林 (1943) が内耳土器の祖型として想定した耳を有する続縄文土器のような資料と誤認する危険性も捨てきれない。やはり土器の外面・内面の型式学的特徴を総合する必要があるが、先述のとおり断面のみが図示されているケースもあることが (Пономаренко 1993 など)、やや慎重な姿勢をとらせる理由のひとつともなっていた。

第2は、内耳土器が出土した各遺跡の放射性炭素年代測定値がともなっていない点である。かりに土器の年代が15世紀以降であることをしめす理化学的な年代があるのであれば、続縄文土器やオホーツク土器が混在する可能性を排除できる余地も生まれるが、残念ながらこれまでにそうした事例はなかった。ポノマレンコ (Пономаренко 1993) による報告でふれられている内耳土器の年代観 (17~18世紀) もロパトカ岬 (デコヴァ調査) やジュパノヴォの測定値を根拠としており、本稿でとりあげた内耳土器が出土したそれぞれの遺跡の層位・遺構の年代が明らかになっているわけではないのである²⁾。

しかしながら、本稿で検討してきたカムチャツカ半島南部出土土器には、縄文をもつ資料、刻文・貼付文・スタンプ文などをもつ資料、底面と胴部の境界部がやや外側に張り出す破片、底径が小さめの揚底の底部破片などは一切なかった。したがって、縄文・続縄文・オホーツク土器はまったく含まれておらず、すべて内耳土器と考えてよい。北千島のオホーツク土器は外面に比較的に入念なミガキまたはナデが施されるため、胴部破片でも一定の大きさがあれば内耳土器とは区別することが可能である。しかしながら、カムチャツカ半島南部出土土器のなかには、明らかにオホーツク文化の土器と考えられる資料はまったく含まれないことがポノマレンコ・コレクションの点検によって明確になった。これにより、カムチャツカ半島南部は先史時代を通じて基本的に土器のない地域であり、内耳土器はそこに分布する唯一の土器であるとみなしてよいことが裏付けられたことになる。カムチャツカ南部で土器が発見されたとすれば、それはほぼ例外なく内耳土器であるというヂコヴァ (Дикова 1983)、ポノマレンコ (Пономаренко 1985, 1993)、山浦 (1993)、杉浦 (1998) らが採用してきた前提に、今後は筆者も同意する。

それでもなお、カムチャツカ半島南部では内耳土器以外の土器が発見される可能性はないとはいえない。大英博物館所蔵資料にカムチャツカ出土とされる貼付文期のオホーツク土器があるが (Watson 1965)、千島列島におけるこの種の土器の分布域を考慮するとカムチャツカ出土資料とは認定しがたく、出土地を記録する際に何らかの間違いが生じたのではないかという山浦 (1989) の指摘が妥当であろう (Takase 2013)。ただし、刻文期の土器が阿頼度島 (右代 1996) や占守島 (馬場 1939a) で多数出土している点からみて、少数のオホーツク土器が今後カムチャツカ半島で発見される可能性を完全には否定できない。ただし、そのような状況が生じたとしても、カムチャツカ半島南部を主たる分布域にふくみこむ唯一の土器が内耳土器であるという評価が簡単にゆらぐことはないであろう。近年、捨子古丹島でも続縄文土器が出土することが知られてきたが (大坂 2010)、本稿で確認してきたカムチャツカ半島における土器の出土状況、および竪穴住居 60 棟以上におよぶ大規模な発掘調査が行われてきた占守・幌筵島でも続縄文土器の出土例はない現状からみて (馬場 1939a, b)、続縄文土器がカムチャツカ半島を主たる分布域にふくみこむ可能性を考える必要もやはりないであろう³⁾。

(2) 内耳土器の年代的位置づけ

北千島およびカムチャツカ半島南部出土内耳土器は、大きく Ia 類と II 類の 2 つに分けることができる (Takase 2013)。Ia 類は、口縁部外面が段をともなっており、これに対応する口縁部内面はぎゅくに幅広く浅い溝となっている。内耳は比較的小さく、長さよりも幅のほうがひろいために全体が横長になるものも多い。内耳の孔の直径は比較的小さい。器壁厚は時期判定のための明確な基準ではないが、おおむね 1.2cm 未満の薄いものが多い傾向がある。口縁部外面に文様は施文されず (底部付近に横走る 1 条の沈線が付されることはある)、口縁部に突起が付くこともない。

これに対して II 類では、口縁部外面の段や内面の溝が消失し、直線的に立ち上がる器壁が特徴的である。しかしながら、内耳との接着部分だけは器壁が外面に低い瘤状に盛り上がる資料も多く認められる。内耳の作りは粗雑で、アーチ状にまげた太い粘土紐を器壁に貼り付けており、その長さは 5cm 以上と大きく、孔の直径も大きい。内耳を頂点側からみたときの平面形全体のプロポーシオンが縦長となる。器壁厚はおおよそ 1.0 ~ 1.2cm 以上と比較的厚いものが多く、外面には刺突文が施されたり、口縁部に突起が付けられたりすることもめずらしくない。

このほか、Ia 類と II 類の双方の特徴を個体内であわせもっている資料を中間的な一群として Ib 類と分類し、また、直立する胴部に口縁部が若干ひらく器形を有する小さな内耳土器を III 類として分類している。放射性炭素年代測定から Ia 類が 15 世紀後半 ~ 17 世紀前半、II 類が 17 世紀後半 ~ 18 世紀に位置づけられ、理化学的な年代測定にもとづく根拠はまだないが型式学的に Ia 類と II 類の中間的様相を呈している Ib 類を 17 世紀代、器形にロシアの鉄鍋の影響が想定される III 類を 18 世紀後半 ~ 19 世紀前半に位置づけている。

このような理解にもとづけば、内耳土器の変遷はすなわち、模倣元である鉄鍋からの形態学的な距離がはなれていく過程と言い換えることもできる。つまり、Ia 類の段階では日本列島の内耳鉄鍋を比較的忠実に模倣した土器が製作されていたが、時間の経過にしたがってその原則が崩れていくプロセスが形態の変化に現れているのである。新しい段階になって突起や文様が出現してくる要因はまださだかではないが、筆者は、突起については吊耳鉄鍋もしくはロシア鉄鍋、文様については Ib 類の成形技術や樹皮製容器との関連があ

表2 北千島・カムチャツカ半島南部における出土内耳土器の類型
(+は出土を意味する。(+)は確定はできないが可能性のあることを示す)

遺跡	Ia	Ib	II	III
北千島 (северные Курильские острова, Northern Kuril Islands)	+	+	+	+
ゴリギナ (Горыгина, Gorygina)			+	
ヤヴィナ3 (Явино-3, Yavino-3)			+	
クリル湖 (оз. Курильское, Kuril Lake)		+	+	
シユシュク1 (Шиюшк-1, Shiyushk-1)	+		+	
シユシュク2 (Шиюшк-2, Shiyushk-2)	+			
ロパトカ岬 (м. Лопатка, Lopatoka Cape)	(+)	+		
アンドリアノフカ (Андриановка, Andrianovka)			+	
トリ・セストルイ I (Три Сестры-I, Tri Sestry-I)	(+)	+	+	
ウタシュド I (Уташуд-I, Utashud-I)			+	
リストヴェンニツナヤ湾 (бух. Лиственничная, Listvennichnaja Bay)		+		
バリシャヤ・サランナヤ (Большая Саранная, Bol'shaja Sarannaja)		+		
バリシャヤ・サランナヤ II (Большая Саранная-II, Bol'shaja Sarannaja-II)		+		
ナリィチェヴォ湖 (оз. Нальчево, Nalychevo Lake)		+		
ナリィチェヴォ 9 (Нальчево-9, Nalychevo-9)		+		
ナリィチェヴォ 12 (Нальчево-12, Nalychevo-12)	(+)	+		
ナリィチェヴォ 15 (Нальчево-15, Nalychevo-15)	+			
バリシャヤ・メドヴェーシュカ (Большая Медвежка, Bol'shaja Medvezhka)	(+)	+		

るのではないかと予測している。

この編年案に照らしあわせると、本稿で取り上げた資料のなかには、確実に Ia 類に対比できる資料は含まれていないと判断できる。ただし、同定の難しいナリィチェヴォ 12 例 (図 7:10, 11)、バリシャヤ・メドヴェーシュカ例 (図 8:1) はつぎの Ib 類に分類される可能性も残されるものの、一方で Ia 類に分類できる可能性もある。口縁部が外側に段をなして張り出し、内面は溝状に凹む。内耳の長さは 5cm 以下と比較的小さく、内耳の平面観は横長を呈している。これらは Ia 類の要素であるが、器壁がやや厚めで、内耳も典型的な Ia 類よりは大型化していると思われる。同様にロパトカ岬例 (図 2:10, 12) も、薄い器壁をもち、口縁内面の溝も明確にみとめられるため Ia 類か Ib 類のどちらかに分類されることが考えられる。かりに内耳部分が残存していれば明確になると思われるが、現時点でどちらになるかを決めることは難しい。

Ib 類に確実に対比できる資料は、バリシャヤ・サランナヤ、ナリィチェヴォ 12 遺跡で検出されている。図 6:13, 14 は内耳の長さが比較的長く、内耳接着部分の外側には大きく低い瘤状の盛り上がりが見られる。これらは II 類の特徴である。しかし、孔の径が小さいものがある、内耳の平面観が横長である、内耳の両脇に横走る溝が作出されている、といった Ia 類の特徴もあわせもっている個体である。また図 7:1 は、口縁内面に溝をもちながらも突起が付されることから、やはり Ib 類に分類される。

II 類に対比できる資料はもっとも数が多い。トリ・

セストルイ I、ウタシュド I 出土土器は、器壁が口縁部まで直線的に立ち上がり、内面に溝はなく、外面の文様や大きな内耳からみても、図 4:8 と 9、図 6:6 と 7 をのぞく多くの破片が II 類に分類されると思われる (図 3~6)。ゴリギナ、ヤヴィナ 3 出土土器には Ia・Ib 類の要素は一切みられず、すべて II 類の特徴をもつものと考えて差し支えない (図 2:1~7)。

ちなみに、III 類に対比できる資料はなく、この類型に該当する資料は、依然として占守島別飛から出土した 1 個体 (馬場 1940) のみにとどまる。

(3) 内耳土器の分布の変遷

以上のような内耳土器の型式論的評価をふまえたうえで、分布の変遷を検討してみよう。表 2 は、北千島・カムチャツカ半島南部から出土した内耳土器の類型を示しており、これをもとに各類型の分布を地図上に表現したのが図 9 である。ここから読み取ることができる内耳土器の分布は、筆者の予測を補強するものとなっている (Takase 2013)。つまり、Ia・Ib 類の段階 (15 世紀後半～17 世紀代) では、東海岸はシブンスキー半島の北岸からロパトカ岬まで、西海岸・西部ではゴリギナ川流域からロパトカ岬まで、カムチャツカ半島南部のかなり広い範囲に内耳土器が分布する (図 9:A, B)。それに対して、II 類の段階 (17 世紀後半～18 世紀) では、西海岸の北限はゴリギナ川流域で前段階と変わりはないが、東海岸では北限がヴェストニク湾北部のウタシュド I 遺跡となり前段階とくらべて直線距離で約 300km も南下する (図 9:C)。

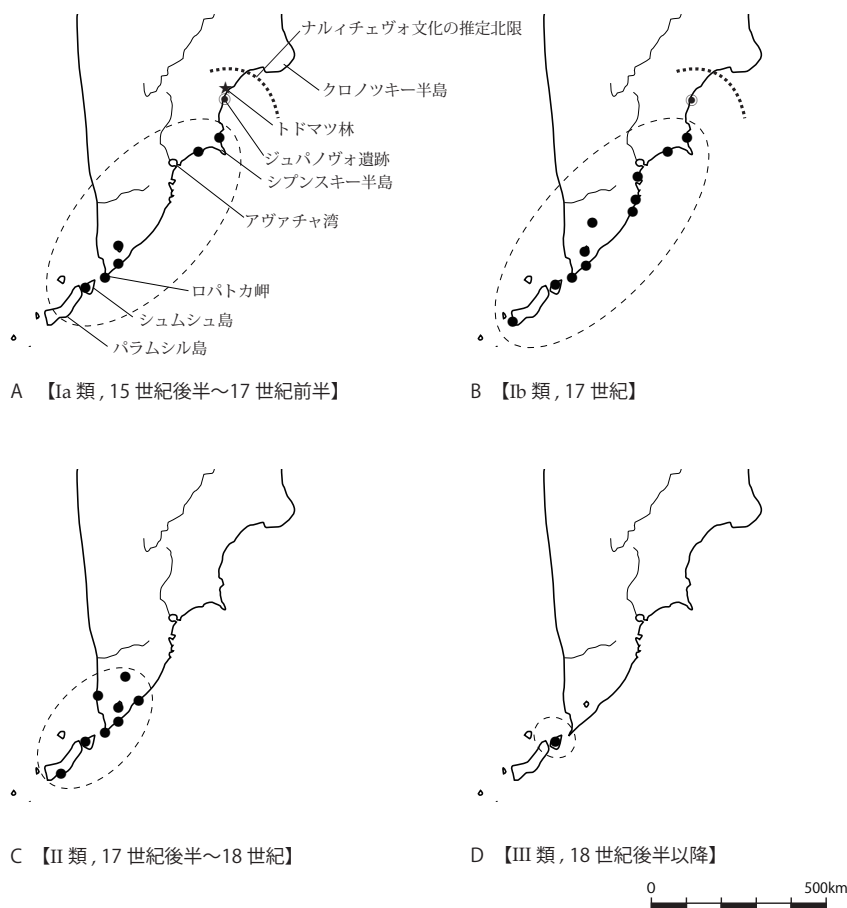


図9 カムチャツカ半島・北千島における内耳土器の分布範囲

筆者 (Takase 2013) は、リストヴェンニツナヤ湾で S. ペルグマンによって発掘された 3 個の内耳土器のうちひとつ (Schnell 1932:PlateXV:2) を Ib 類、もうひとつ (ibid.:PlateXV:3) を暫定的に II 類に分類したうえで、これまでは後者の資料が II 類の北限になると考えてきた (高瀬 2014)。なぜなら、公表されている写真からは、後者の口縁部外面に刺突文と口唇部の突起がみられ、なおかつ外面に段がないことがわかるからである。しかし、かりにこの土器片の内面に小さな内耳や溝があれば、Ib 類となる可能性ものこされており、これが「暫定的」とした理由である。

いっぽう、3 個目の個体 (PlateXV:1) には内面に溝がないことは理解できるが、土器片と石膏による復元部分が区別しにくいために、小さな内耳とその上部につく突起の存在が予測されるものの確証をもつだけの材料がなかった。しかし現在、この個体 [東アジア博物館 (East Asian Museum) 保管] のカラー写真がスウェーデンの世界文化博物館 (The Museum

of World Culture) のウェブサイトで公表されている⁴⁾。それによると、やはり内耳は II 類のように長さが 5cm 以上となるような大きなものではなく、孔も小さいことがわかる。さらに、内耳の断面形態はやや三角形に近くなっており、その上部にごく小さな突起があるとはいえ、内耳鉄鍋の内耳の形態的特徴をまだ残していると判断できる。したがって、この資料はたしかに II 類の条件を多くそなえてはいるものの、内耳の特徴は Ia 類にちかく、個体内で Ia 類と II 類の特徴をあわせもった Ib 類に分類される。よって、リストヴェンニツナヤ湾ではこれまで公表されている 3 個体中 2 個体が Ib 類に対比できることになる。表 2 から明らかとなっており、ひとつの遺跡から Ia・Ib 類と II 類の双方が出土することは、ロパトカ岬周辺やクリル湖周辺の大遺跡以外においてなく、この事実を援用するならば、小規模な遺跡と考えられるリストヴェンニツナヤ湾遺跡は Ib 類のみを出す遺跡であると考えられる。ペルグマンの資料は可能なかぎりはやく

実見し、その型式論的な特徴を確認したいと考えているが、これまで暫定的にⅡ類に分類してきた土器片 (ibid.:PlateXV:3) の内面には溝や小さな内耳があることが予測され、Ⅱ類に属すると予測できる。報告 (ibid.) にあるように器壁の厚さが0.8mmと比較的うすい点も、この予測と整合的である。したがって、現段階ではⅡ類の分布の北限は本稿で拓本・実測図を提示したウタシュドⅠ遺跡であると想定しておきたい。Ⅱ類が17世紀代、Ⅲ類が17世紀後半以降という年代観にもとづくと、カムチャツカ半島における内耳土器の分布域はやはり17世紀後半～18世紀初頭に大幅に縮小したと想定できる。後述するジュバノヴォの調査成果を考慮に入れると、内耳土器の分布域がせまくなったのは実際には17世紀末～18世紀初頭の非常に短い期間であったと考えられる。

このような内耳土器の分布域の変化は、他の物質文化からも追認できる。ここでは、竪穴住居に目をむけてみよう。北千島では、古い段階で単室の竪穴住居が用いられ、新しい段階で複室となり出入口も長大なものに変化する (高瀬・鈴木 2013)。カムチャツカ半島南部では、単室で入口のつく竪穴住居はひろく分布しているが、18世紀以降と考えられる複室の竪穴住居はこれまでのところトリ・セストルイ遺跡でしか見つかっておらず (Пономаренко 1993)、バリシャヤ・サランナヤ湾沿岸における筆者らの分布調査 (2014年) でもすべて単室の竪穴住居だけであった。あくまでも地表面から確認することができる情報でしかないが、Ⅱ類の土器の分布域外には複室の竪穴住居は分布しないはずである。現在、この推定と矛盾する現象は確認されていない。

Ⅲ類の土器は、北千島に1個体が分布するのみで (馬場 1940)、依然としてカムチャツカ半島における発見例はない (図9:D)。18世紀後半～19世紀には、内耳土器の製作・使用そのものが低調になったと考えざるをえない。また、カムチャツカ半島ではⅢ類の時期にまでくだるキテや竪穴住居跡の確実な例はみあたらないことから、たんに土器の使用が衰退しただけでなく、その使用者たちがカムチャツカ半島に居住する機会もほとんどなくなっていったとみるべきであろう。

以上のような内耳土器の分布の変遷は、北千島・カムチャツカ南部の歴史にかかわる重要な情報を示唆しているにちがいない。以下では、この現象が千島アイヌの歴史のなかでどのような意義を有しているかを考察するが、集団の記載方法については依然として混乱の火種が内包されている。したがって、まずはこの

問題について整理しておく。

(4) 集団記載方法の整理

内耳土器にともなうキテやマレク、北千島と共通する竪穴住居の規模・形態やその付属施設 (出入口、土坑)、遺構・遺跡の分布傾向 (ほとんど切り合うことなく海岸部の段丘・砂丘上に数棟以上でまとまって分布する点など) を考慮すると、内耳土器の分布範囲は千島アイヌおよびその祖先集団であるクリルの居住範囲であるとみなしても大きな間違いではないと思われる。また、1) 土器製作の伝統がないカムチャツカ半島南部に15世紀以降突如として土器が出現すること、2) しかもその土器は日本列島の内耳鉄鍋を模倣した内耳土器であること、3) 最古段階のⅠa類の内耳土器は製作技術がきわめて秀逸であること (別稿で詳論予定)、4) 内耳土器の分布域はそれが出現する直前の段階においてはほぼ無人か人口密度がきわめて低かったと考えられること (e.g., Fitzhugh et al. 2002, 天野ほか 2007, 手塚 2007, 2010, Phillips 2011), などを考慮すると、内耳鉄鍋・内耳土器の分布圏内の集団が北千島・カムチャツカに移住してきたことは間違いないと考えられ、その集団が千島アイヌへとつらなってゆくとの理解も妥当であると思われる。

無論、たとえば大まかにではあっても特定の考古資料と集団をむすびつけることができるこのような事例は、考古学では一般的ではない。このような特殊状況が生じているのは、文献史料の存在する比較的新しい時期であることにくわえて、土器を用いない地域に土器が出現する、それまで人がほとんどいなかった地域に人が移住する、内耳土器の模倣元が確実に日本列島の内耳鉄鍋であることが特定できるなど、いくつかの条件が偶然重なった結果である。とはいっても、この「内耳土器を構成要素とする物質文化複合＝千島アイヌ」という図式を無批判に用いることは逆に歴史の叙述に混乱をまねき、千島アイヌ自身が経験した複雑な歴史過程に配慮できなくなってしまう危険性があることにも注意が必要である。なぜなら、文献上にみられる民族集団のちがいは内耳土器の使用の有無にもとづいて区別されているわけではなく、むしろ当事者の意識や言語、風貌や慣習など物質文化以外の要素が決定的な指標になっているからである。また、どのような基準を採用するにせよ、千島アイヌは隣接する空間に居住するイテリメン (カムチャダル) と、つねに明確な一線を引けることが保証されているわけではなく、後述するようにむしろ両者の混交状態こそを歴史

の一断面として評価しなければならない局面も必要になってくると予測されるからである。

そこで筆者は、考古学においては、民族分類とはべつに考古学的文化を基盤として議論をすすめる必要があると考える。デコフ (Диков 1979) による「古イテリメン文化」の南カムチャツカ (ナルィチェヴォ) 類型、またポノマレンコ (Пономаренко 1985) による東カムチャツカの「古イテリメン文化」のうちもっとも新しい紀元後二千年紀に位置づけられたナルィチェヴォ期の物質文化を、「ナルィチェヴォ文化」とする。ナルィチェヴォ文化は「古イテリメン文化」の一部と考えられてきているが、その内部に内耳土器やキテをふくんでいることからイテリメンよりはアイヌとの関連性がつよいとみなすことができる物質文化複合である⁵⁾。したがって、筆者はナルィチェヴォ文化を「古イテリメン文化」の一部とはせずに、それとは独立した考古学的文化と考える。内耳土器もまた、このナルィチェヴォ文化を構成する重要な一要素である。この考古学的な文化について、それを担った集団の次元を意識して記述する際には「ナルィチェヴォ文化の担い手」(the bearers of the Nalychevo Culture) のタームを使用する。

民族分類については、現在は固有の言語・文化の文化継承者はいないとされているものの (e.g., 村崎 1963, ザヨンツ 2009), 「千島アイヌ」(the Kuril Ainu) を 18 世紀後半以降にアイヌ語千島方言を使用した民族をさす語として使用し、その祖先集団と考えられるがそれ自体もまた歴史的過程を経ている 18 世紀前半以前の千島列島北半部～カムチャツカ半島南部の居住者を同時代の史料にならって「クリル」と記載する。混乱・誤解をさけるため、クリルの英語表記は「the Kurile」を用い、湖や列島など地名に関わる表記には「Kuril」を用いることを提案したい。時期的に 18 世紀の半ばをまたぐため、「クリル」と「千島アイヌ」のどちらかに限定することができない場合は「クリル／千島アイヌ」(“the Kurile/Kuril Ainu”) と表記する。「千島アイヌ史」のタームは広義にはクリル／千島アイヌの歴史を示し、狭義には 18 世紀後半以降の千島アイヌの歴史を意味する。本論の表題にある千島アイヌ史は、広義のそれである。

さらに、カムチャツカ半島南部・中央部の先住民のうちイテリメン語の使用集団を「イテリメン」とよび、「カムチャダール」は用いない。ただし、19 世紀以前の文献では「カムチャダール」の語が用いられていることが多いため、文献中の語を尊重してそのまま記述

する際には「<カムチャダール>」と表記することとする。近年のカムチャツカ半島では、イテリメンのなかに意識的にカムチャダールを標榜する人々が増えてきているが、これはまず現代の社会変化の問題として受けとめる必要があり、カムチャダールの語を千島アイヌ史の議論のなかですぐに用いることはしない。

このような用語の使い分けによって、物質文化からみた集団と、民族呼称の関係は整理しやすくなると思われる。少なくとも両者が渾然一体となった議論は回避できるはずである。

(5) ナルィチェヴォ文化の担い手のカムチャツカ進出

ナルィチェヴォ文化が出現した 15 世紀後半～17 世紀前半の直前に、カムチャツカ半島南部に分布していた考古学的な文化や遺跡は明確には認められない。杉浦 (2011:135) は、「クリルは北海道アイヌとの交易によって経済的・軍事的にも優勢にあり、イテリメンの住地であったカムチャツカ南部に侵攻して占拠した」と考えている。だが、現在の考古学的な情報にしたがうかぎり、初期のナルィチェヴォ文化が武力的な抗争をともなう分布域をひろげたと考えよりは、人口がきわめて希薄な場所に出現・拡散したとみたほうが妥当である。

いっぽう、北千島ではナルィチェヴォ文化 [あるいは内耳土器時代 (馬場 1939a)] のまえにオホーツク文化が位置づけられている (馬場 1939a, 1939b)。しかし、この地域のオホーツク文化は 13 世紀までには終焉をむかえていたことをしめすデータはあるが、15～17 世紀まで存続したことを裏付けるデータはほぼ皆無とみてよい (e.g., Fitzhugh et al. 2002, 手塚 2007, 2010, Phillips 2011)。オホーツク文化の担い手の末裔たちがクリルの一部につながってゆく可能性は (杉浦 1998:516)、現時点でほとんど考慮する必要がないであろう。たとえ、そうした集団がいたとしても、ナルィチェヴォ文化が出現した背景には外部から流入してきた集団のインパクトがきわめて大きく関与していたと想定するほかなく、そこでオホーツク文化の末裔が果たした役割はきわめて限定されていたと見積もらざるをえない。

カムチャツカ半島東南部で内耳土器をだす多くの遺跡では、ナルィチェヴォ文化の文化層の下位に、黒褐色・暗褐色砂質シルトをはさんでクスダーチ山起源の KS1 テフラ (1806±16yBP, ラボナンバー不明, Braitseva et al. 1997) がみとめられる (図 10)。ナルィチェヴォ期の竪穴住居は、この火山灰層を切って構

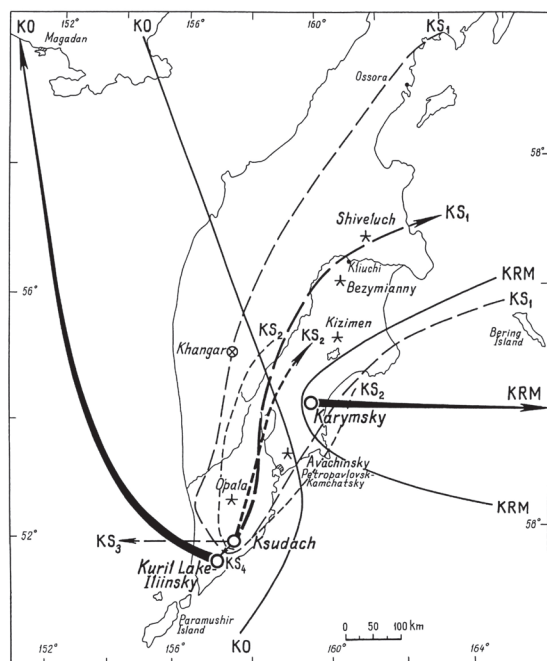


図 10 カムチャツカ半島のおもな広域テフラ (Braitseva et al. 1997)

築されるのが通例である (e.g., プタシンスキー・高瀬 2008). さらに, KS1 の直下には, きわめて頻繁にタリヤ期 (紀元前 1 千年紀～1800yBP) の文化層が認められる⁶⁾. 半島東南部の沿岸では, タリヤ期の文化層の下位には基盤となるローム層や段丘礫層が認められることが多く, 新石器時代の遺跡と重複することは稀である.

このような層準のパターン, すなわち上位から表土→ナルィチェヴォ文化層→黒褐色・暗褐色砂質シルト層→KS1→タリヤ文化層→自然堆積層という順序は, つぎのような過程をしめしていると思われる. すなわち, 紀元前 1 千年紀～1800yBP のカムチャツカ南部においては, 石刃石器群をとまう新石器時代 [ウシュキ遺跡群第 5～3 文化層 (Диков 1977, 1979) を想定しておく] の遺跡立地とはことなる沿岸部に, 一定の海洋適応を達成したタリヤ文化が分布していた. しかし, 1800yBP における KS1 の降灰ののち同文化の遺跡は形成されなくなる. この噴火 (ca.18-19 km³) は, 火山爆発度指数 (Volcanic Explosivity Index, Newhall and Self 1982) 「6」の「巨大噴火」であり, 完新世の地球最大の火山爆発である 7600yBP のクリル湖の噴火 (K0, ca.140-170 km³) について, 完新世のカムチャツカでは 2 番目に大きな噴火である (e.g., Kyle et al. 2011).

カムチャツカ半島東南部 (とくにヴェストニク湾沿岸～ナルィチェヴォ岬周辺まで) の人口の少なさは, この火山噴火がひとつの引き金となって生じた可能性は考慮に入れられてよいと思われる. KS1 の上部には黒褐色・暗褐色の砂質シルトなどが堆積していることから, 1800yBP から紀元後二千年紀前半のあいだに植生は一定程度回復していたと予測される. しかし, この間のカムチャツカ半島南部では海洋漁労・海獣狩猟ではなく, 内水面漁労を経済の中核とする先史文化が発達したために, 沿岸部ではなく半島最大の河川である半島中央部を流れるカムチャツカ川流域や半島西海岸の大河川流域に遺跡が集中することとなった⁷⁾. これらの遺跡をのこした人々が, 主たる系統としてイテリメンにつながってゆく集団となったにちがいない. いっぽう, 明確な理由はまだ不明ではあるが, 考古学的な遺跡の僅少性から半島東南部の沿岸部は紀元後二千年期前半においても依然として無人か, 人口がきわめて少ない状態が継続していたと考えられる. こうした状況があったからこそ, 15 世紀後半～17 世紀前半に内耳土器をたずさえて南から進出してきたナルィチェヴォ文化の担い手は, 北千島を足がかりとしてカムチャツカ半島南半の広い範囲を容易に活動の射程におさめることができた と推察される⁸⁾.

(6) ナルィチェヴォ文化の北限

ナルィチェヴォ文化の範囲はクリルの進出域とも密接に関わっているにちがいないが, その北限はどのあたりだったのであろうか. 現在のところ, 内耳土器の分布の北限はシプンスキー半島北岸のバリシャヤ・メドヴェーシュカ遺跡群である (図 9:A, B). ただし, 内耳土器はまだ発見されていないものの, 物質文化複合全体をみすえた際のナルィチェヴォ文化の北限は, さらに北のジュパノヴォ遺跡 (Пономаренко 1985) とみるのが妥当であろう. 現時点ではナルィチェヴォ文化の北限はクロノツキー湾 (Кроноцкий залив) の中央部付近にあると考えておきたい (図 9:A)⁹⁾.

ジュパノヴォ遺跡第 1 文化層の住居跡からは, 文銭をふくむ寛永通宝や刀子が出土しており, 同文化層からは鉋頭やキセル, 肥前焼も出土している. 第 1 文化層の 2 点の試料の放射性炭素年代測定値はおなじ 320±40yBP (ИВАН-342, 344) であり, 較正プログラム OxCal4.2 (Bronk Ramsey 2014) をもちいて IntCal13 により暦年較正 (2σ) すると 1468AD-1649AD である. これはナルィチェヴォ 9 (プタシ

スキー・高瀬 2008) やシユシユク 2・ガヴリューシユカ遺跡 (Takase 2013) とほぼ同じ年代である。人工遺物のうち鉚頭は、斜位に配置された 2 個の索孔と開窩・閉窩のソケットをもつもので、宇田川 (1989) 編年では d, d', e 類との共通性が高く、16～17 世紀に位置づけられる。キセルの年代は 17 世紀後半、銅銭や陶磁器の年代は 17 世紀後半～18 世紀初頭と判断されており (野村・杉浦 2000a, b), これが本遺跡の年代の下限となろう。現在、日本列島と北海道のあいだで距離による物質文化の年代差を考慮する必要性は認識されていないが、千島列島を介した人の往来が十分に想定され、17 世紀のデンペイのように漂着船の存在も考慮に入れる必要があることから (川上 2011), 北海道とカムチャツカ半島のあいだにおいても傾斜編年を採用すべき必然性はみあたらない。これを前提として先述の年代にかかわる情報を総合すると、ジュパノヴォの第 1 文化層は 15 世紀後半～17 世紀前半においてはまだ形成途中にあり、17 世紀末～18 世紀初頭のあいだに形成が終了したと考えることができる。ナルィチェヴォ文化の担い手は、17 世紀末～18 世紀初頭ころにジュパノヴォ遺跡から姿を消したのである。

この点は、II 類の内耳土器の分布域縮小と整合的である (図 9:C)。縮小後の内耳土器の分布域は、18 世紀前半の文献で「近いクリル」とよばれた集団の居住範囲やアイヌ語地名の分布 (Murayama 1968) に類似してくる。「近いクリル」の大部分はナルィチェヴォ文化の担い手によって構成されていると考えられ、19 世紀段階ではその居住範囲はさらにせまくなり、カムチャツカ半島自体が利用されなくなっていくものと思われる。鳥居龍蔵 (Torii 1919) が記録した千島アイヌの代表的な民族誌は、19 世紀初期の千島交易ルートの遮断やロシアからの影響強化 (川上 2011, 佐々木 2014 など) などにとどまらず、カムチャツカ半島の利用に象徴される複雑で分厚い歴史過程を経験したあとの千島アイヌのすがただったのである。

(7) トドマツをめぐる論争

ナルィチェヴォ文化の北限に関連して、植物をめぐる興味深い論争がある。トドマツ (*Abies sachalinensis*)¹⁰⁾ は北海道島、サハリン島、南千島にひろく分布するが、中千島・北千島には分布しない (e.g., 菅原 1937, 宮部・工藤 1986, 牧野 2000, 佐藤 2011)。しかし、カムチャツカ半島には飛び地的に分布しており、しかもそれがみられるのはジュパノヴォ遺跡にほどこかいセミヤチク川下流域の数十 ha の

範囲のみである (図 9, 11)。この個体群はトウシラベ (*Abies nephrolepis*) と交雑している可能性も考慮されるようになってきているが、交雑の程度やカムチャツカにおけるトドマツの出現経緯についてはいまなお明確にはなっていない (Ябуков 2010: 32)。植物学・火山学者のあいだには、カムチャツカのトドマツを外部から人為的にもちこまれたものとする意見が 1960 年代から根強くあり (e.g., Турков и Шамшин 1963, Карпачевский, 1968, Хоментовский 1985, Недолужко 1995), トドマツ林自体をサハリンや千島列島のアイヌとの戦いで命を落としたイテリメンの墓地とする考えも提起されている (Бобров 1978)。ちなみに、トドマツ林の近隣にも複数の遺跡が確認されており、すぐ近くを流れるピフタ川 (ピフタはロシア語でトドマツを意味する) の対岸には 2 棟の竪穴住居跡が確認されている (Пономаренко 1985:114-115)。竪穴住居内の表土直下が炭をふくむ文化層となっている点はタリヤ文化期ではなく、やはりナルィチェヴォ文化の遺構である可能性が高いことを示している。また、セミヤチク川河口部にもセミヤチク I, II 遺跡、セヴェルヌイ・セミヤチク遺跡が確認されており (Пономаренко 1985:22-23, 90-91, 114-116), 出土遺物は報告されていないが地表面から確認できる数十棟におよぶ竪穴住居の形態と分布パターンからみてイテリメンの集落・墓地というよりはナルィチェヴォ文化期に属する蓋然性が高いと判断できる。トドマツが持ち込まれた年代にも諸説があるが (e.g., Турков и Шамшин 1963, Соколов 1973, Егорова 1980, 1982), 花粉分析, 火山灰, 火山活動史の情報などから 1000 年前よりも新しい時期、すなわち数百年前とする意見が優勢のようである (Карпачевский 1968, Хоментовский 1985)。

人為説に対して、自生説も主張されている (e.g., Хотинский 1977, Недолужко 1995, Шамшин 1999, Якубов и Чернягина 2004)。だが、人為説を否定できるだけの十分な根拠があるわけではなく、2004 年に自生説を支持していた V. V. ヤクボフも 2010 年刊行の図鑑では自生説の主張はトーンダウンしている (Якубов 2010)。最新の花粉分析でも、人為説よりは自生説が支持されると結論づけられてはいるものの (Dirksen et al. 2013), 検出されたトドマツの花粉は 1 個のみで、約 1.1-0.9ka というその年代も十分な裏付けがあるわけではない。しかも、本来のトドマツ林の分布域からは大きくはずれた半島中央部のデータが検討されており、有効な仮説の検証とはなっていない。

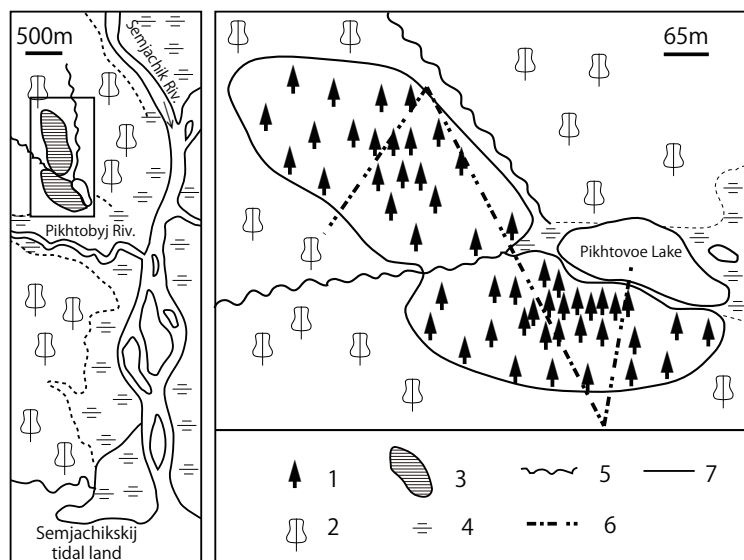


図 11 カムチャツカ半島におけるトドマツ生育地 [Хоментовский (1985) を再トレース。
1: トドマツ (濃密な分布範囲の模式的表示), 2: ダケカンバ, 3: トドマツ林の拡がり,
4: 湿地, 5: 涸れ沢, 6: 調査者の調査ルート, 7: 林の境界]

現段階では人為説と自生説のどちらにも決定的な証拠があるわけではなく、議論は膠着状態にある。ただし、これまでの研究によってカムチャツカ半島におけるトドマツの出現がおおよそ 1000 年以上前に遡る明確な証拠がないことが明らかになってきている点は重要である。これは自生説にとって、有利な条件が少ないことを意味している。人為説をとる場合、カムチャツカ半島が千島列島を介してトドマツの分布域である北海道・南千島やサハリン [とくにシュミット線の南側 (沖津 1996)] と文化的な関係を有していたと想定できる時期は 3 つある。第一は続縄文文化並行期で、カムチャツカ半島ではタリヤ文化期に相当する。しかし、その実年代はおおよそ紀元前 1 千年紀であり、文化的な接触があったとしても、トドマツが入ってきた時期には合致しない。第二はオホーツク文化期であるが、紀元後一千年紀後半であるため、やはりトドマツがうごいた時期として想定することはできない。したがって、トドマツがカムチャツカ半島に持ち込まれたとするならば、その時期はつぎのナリィチェヴォ文化期がもっとも有力な候補となる。

ところが人為説では、カムチャツカにトドマツを持ち込んだ主体としてイテリメンが念頭におかれてきており、またそれを批判する自生説側も漁撈・狩猟民であるイテリメンがこうした植物を持ち込む合理的な理由がない点を批判してきている。だが、ナリィチェ

ヴォ文化の拡がりや内耳土器の分布をみると、考慮に入れられるべき集団はイテリメンではなく、明らかにクリル／千島アイヌである。しかも、トウシラベの遺伝子が入り込んでいるのが事実であるとするならば、朝鮮半島・中国東北部・ロシア沿海地方・アムール川流域もしくはそれに隣接する地域から持ち込まれた可能性にも光をあてなくてはならなくなる。管見のかぎり、サハリンにおけるトウシラベの分布は確認できていないが (菅原 1937, 沖津 2000), 現在のトウシラベ分布域に隣接し、また頻繁にアムール川流域との先住民の往来があったことが知られているサハリンまでを視野に入れた検証作業が今後必要に

なってくると予測される。物質文化研究からは、千島アイヌとサハリンの関係性を吟味することの重要性はすでに指摘されているが (小杉 1996, 1997, 高瀬 2013), おなじことが植物 (トドマツ) や動物 (イヌなど) にもあてはまる点は¹¹⁾、今後の研究方針の策定にとって非常に示唆的である。

(8) ナリィチェヴォ文化分布域縮小の背景

18 世紀にいたって、カムチャツカ半島におけるナリィチェヴォ文化の分布域は大幅に縮小する。この要因を特定することはまだ難しいが、内的な要因と外的な要因の双方を念頭に置いておくことが必要である。内的な要因としては、18 世紀初頭の前後で資源利用や土地利用の内容、あるいは交換・交易の方式などに変化が生じた可能性が想定できる。

外的な要因として想定されるのが、ロシア人のカムチャツカ半島への本格的な進出である。V. アトラソフがカムチャツカに到達した 17 世紀末 (1697) から 18 世紀前半は、ロシア人と先住民とのあいだで血みどろの戦争が繰り返された時代である。イテリメンの主たる居住地であるカムチャツカ川流域では激しい戦闘がつづき、派遣されたロシア人総督・徴税吏がつぎつぎと殺害されたことが記録されている (e.g., オークニ 1943)。カムチャツカ川流域で発達したオストローグやガラディシチェとよばれる要塞には、ニクリ

スコエ遺跡 (Диков 1977) のように 17 世紀以前にさかのぼる遺跡もある。これらがイテリメン集団内部の闘争により生じてきた可能性を筆者は否定しない (e.g., 鈴木 1965, 加藤 1979, 1980)¹²⁾、ロシア人との接触以前からすでに萌芽的な階層社会と集団間の戦闘が認められるという初期民族誌の検討結果にも同意する (Shnirelman 2001, 杉浦 2011)。だが、考古学的に確認できる多くの要塞遺跡が 17 世紀末～18 世紀前半に構築あるいは堅牢化されたこともまた事実と考える (宇田川 1989, 右代 2000, 2001)。こうした状況下において、ナルィチェヴォ文化の担い手はロシア人による徴税や彼らとの戦闘を避けるために半島南端近くまで活動領域を縮小させた可能性も考慮しておく必要がある。実際、アトラソフもその第一陳述書において、クリルの砦のうち 1 つを占領し 50 人全員を殺害したとのべており、西海岸ではクリルとロシア人の戦いも 17 世紀末にはすでに勃発していた可能性がある (Оглоблин 1891)。

第二次ベーリング探検隊の記録には、アヴァチャ湾、ナルィチェヴォ湖、シプンスキー半島周辺におけるクリルの記録はみられない (Krasheninnikov 1754, Steller 1774)。このため、ナルィチェヴォ文化の担い手は少なくとも 1740 年代前半にはこれらの地域から姿を消していたと考えられる。さきにみたように、ジュパノヴォでは 17 世紀末～18 世紀初頭に遺跡形成が終了しているので、おそらく 18 世紀初頭までにはナルィチェヴォ文化の担い手はより南へと移動していたのであろう。

いっぽうでクラシェニンニコフは、＜カムチャダル＞には言語からみて南北二つのグループがあり、両グループはナルィチェヴォ川河口で接していたと記録している (Krasheninnikov 1754:193)。考古資料の理解からは、1740 年代にナルィチェヴォ川河口～アヴァチャ湾付近にナルィチェヴォ文化の担い手が居住していたとは考えられないため、ここでいう＜カムチャダル＞の南部グループはやはりイテリメンの一集団であると理解するほかない。本拠地のカムチャツカ川流域での戦争もあり、ナルィチェヴォ文化の担い手が 18 世紀初頭までに立ち去ったあと、あらたにイテリメンがナルィチェヴォ川の河口付近からその南側に居住するようになっていたのであろう。

また、のこされた言語の記録から、18 世紀初期においては「近いクリル」と「遠いクリル」の言語はともにアイヌ語千島方言であったが、「近いクリル」は 18 世紀なかばまでにカムチャダル語をも併用

するバイリンガルになったという仮説もある (村山 1987)。18 世紀前半は「近いクリル」とイテリメンの関係が急速に緊密化していた時期でもあり、クラシェニンニコフはともに、「近いクリル」の慣習・風貌・言語は＜カムチャダル＞にちかく、＜カムチャダル＞(とくにその南部グループ)から派生したと推測している (Krasheninnikov 1754:195)。遠近の両クリルとナルィチェヴォ文化の担い手は、どこまでいってもまったくのイコールとなることはない。しかしそのいっぽうで、クリルの大部分はナルィチェヴォ文化の担い手によって占められていたと考えるしかないこともたしかであり、考古学的な検討結果を参照するとクリル(とくに「近いクリル」)の居住域は 18 世紀はじめの段階でカムチャツカ半島南端近くに集中するようになる。しかし彼らは、それ以前にはイテリメンと隣接する空間範囲のなかで、最長で 15 世紀後半～1700 年ころの 250 年間にわたってカムチャツカ半島に居住していた。その間、彼らはナルィチェヴォ文化の担い手であったとしても、言語・遺伝子だけでなく衣服や装飾品などの外見的特徴はイテリメンからの影響を受けていた可能性も否定はできない。そうした「近いクリル」がカムチャツカ半島南部に集住するようになったことで、第三者からみると「近いクリル」がバイリンガルになったと受け取られるような状況が生じたのかもしれない。さらに、＜カムチャダル＞の言語には方言が多かったが (Steller 1774:161)、それはとくに南部グループで顕著であったという (Krasheninnikov 1754:193)。これは逆に、＜カムチャダル＞が「近いクリル」から言語のうえでの影響を受けていたことや、イテリメンの南部グループがいくつか異なる地域から移住してきた集団から成り立っていたこととも関係があるのだろう。「近いクリル」がイテリメンからどれほどの影響を実際に受けていたのかを、文献史料から推し量ることはきわめて難しいが、物質文化を介してこの問題に接近することは不可能ではない。たとえば、石ランプの分布と変遷 (鈴木 2013) は千島アイヌの歴史全般にかかわるものではないとしても、この脈絡においては意味をもってくる。

5. 結論

本稿では、カムチャツカ半島南部の広い範囲をカバーしているポノマレンコ・コレクション(カムチャツカ地方統合博物館)を中心とした土器資料の型式論的・分布論的検討により、以下の点を明らかにすることができた。

表3 千島アイヌ史の時間的枠組み [中・後期の一部は川上 (1996) が提唱する交易からみた時期区分を参照して作成]

時期区分	年代	集団呼称
前期	15c 後半～17c	クリル
		移住、北千島およびカムチャツカ半島南部の広い範囲での居住
中期	18c 初頭～1798	
		北千島・カムチャツカ半島南端での居住、イテリメンとの通婚、毛皮税徴収の開始、ロシア人からの文化的影響の強化
	1期 1799～1807	幕府東蝦夷地版上知～ 択捉島襲撃事件
	2期 1807～1875	千島交易ルートの遮断
後期	3期 1875～1884	樺太千島交換条約 中・北千島の日本への帰属
	4期 1884～1945	強制移住、色丹島での居住 人口急減
	5期 1945～	北海道などでの居住 文化継承者の減少・消滅

- 1) カムチャツカ半島南部から出土する土器は、基本的にすべて内耳土器である。
- 2) 内耳土器の型式学的特徴と分布から、その使用者は15世紀後半～17世紀にはロパトカ岬からシプンスキー半島北側までのひろい範囲を活動の舞台としていたが、18世紀以降にその範囲が縮小し半島南端部（ロパトカ岬～ヴェストニク湾）に限定されるようになる。19世紀以降はカムチャツカ半島自体がほとんど利用されなくなるほか、土器の製作・利用も衰退する。
- 3) 内耳土器は、ナルィチェヴォ文化を構成する一要素である。ナルィチェヴォ文化は、ヂコフ（Диков 1979）が設定し、ヂコヴァ（Дикова 1983）、ポノマレンコ（Пономаренко 1985）が具体化した古イテリメン文化のなかのナルィチェヴォ類型・ナルィチェヴォ期の物質文化複合の内容をそのまま流用したものである。ただし、古イテリメン文化の一部に位置づけるのは不適切であるため、それとは独立した考古学的文化として取り扱う。
- 4) カムチャツカ半島東南部では上位からナルィチェヴォ文化期文化層—黒褐色・暗褐色砂質シルト—KS1 (ca.1800yBP)—タリヤ文化期文化層という層序のパターンがひろく認められる。タリヤ文化がクスダーチ山の噴火によって大きな打撃を受けたのち、ほとんど人類が利用していなかった土地へナルィチェヴォ文化の担い手が進出した可能性が高い。

5) クリル／千島アイヌの大部分がナルィチェヴォ文化の担い手によってしめられていることを前提にすると、クリル／千島アイヌの居住域は18世紀において急速に縮小したと考えられる。その背景には、資源・土地利用方式の変化といった内的要因と、ロシア人のカムチャツカ半島への本格的な進出をはじめとする外的要因が想定される。

ここまでの検討および交易・経済からみた時期区分（川上 1996）を参考として、広義の千島アイヌ史、すなわちクリル／千島アイヌの歴史の時間軸にかかわるスキームを筆者なりに整理すると、表3のようになる。後期（おもに19世紀以降）の研究は文献史における高い精度での議論に大きな期待がかかるが、イテリメン、ロシア人をはじめとする他集団からの影響などは考古学が貢献できる領域であろう。考古学はおもに前期と中期の解明に効力を発揮すると思われ、これらの時期は今後さらに細分される公算が大きい。また、前期の移住以前の前史についても、考古学的な研究の進展によって将来的につけくわえることができるようになるかもしれない。

以上のとおり、カムチャツカ半島南部における土器の変遷・分布を糸口として、同半島内におけるクリル／千島アイヌの歴史について明確にできる部分は確実に増加してきている。つぎに必要なとなるのは、内耳土器からえられたクリル／千島アイヌの居住地の変遷に関する見通しを他の資料から検証すること、また物質文化の諸要素を本格的に周辺諸集団と比較することで彼らの起源問題に関わる情報を蓄積してゆく点にある。さらに、前期（15～17世紀）と中・後期（18～19世紀）とではクリル／千島アイヌの経済の内容は大きく異なっていた可能性が高く、この点の実証も課題である。なぜなら、カムチャツカ半島を利用するか否かで、木材（とくに大径材）、黒曜石、ヒグマ、ビッグホーン、トナカイ、サケ科魚類など入手できる資源の種類や量が大きく異なってくると予測されるからである。

日本列島の史料ではラッコの毛皮にかかわる記事は15・16世紀からあらわれており（e.g., 児島 1994, 2003, 関口 2013）、そこでは交易物資・献上品としてすでに高い価値を持っていたことが推定できる。17世紀前半段階でもラッコの毛皮は交易物資として北海道に運搬されてきていたことは確実に（チースリク 1962）、クリルが北千島・カムチャツカに移住してきた理由のひとつに、毛皮をはじめとする動物質資源の確保が含まれていた可能性は否定はできない。しか

し、クリルがラッコの個体数をもっとも多かったと推察される中千島を積極的に利用していた形跡は、前期段階ではまったくみられない。「ラショワ島アイヌは江戸期だけではなく、史料に現れる以前においても、交易の民であったことが考古学上の知見からも想定できる」(川上 1997:90, 2011:390) との意見もある。しかしながら、17 世紀以前にラショワ島はもとより中千島にアイヌが居住し、なおかつ交易をおもな生業としていたことを示す考古学的な証拠はほぼ皆無といってよい。したがって、毛皮の確保を移住の主要因とすることにも、まだ難しさののこっていると考ええる。中千島が、大陸や北海道のような大規模な島からもっとも離れており、島のサイズも小さいために適応が困難であったという島嶼生物地理学的な事情や (e.g., Fitzhugh et al. 2002, 2004, 手塚 2004), 調査が行き届いていない点にももちろん配慮は必要である。しかしこれまでの諸資料を総合すると、クリル/千島アイヌがその経済の重要な部分に毛皮の交易をおき、千島だけでは確保が難しい多くの生活必需品を外部に依存するようになったのは、カムチャツカ半島の利用を大幅に縮小あるいは中止した中期 (18 世紀初頭) 以降であった蓋然性がたかいとの予測をたてている。日本・ロシア双方の文献史料から読み取ることのできる中千島の積極的な利用もまた、中期前半に生じてきた社会・経済変化のひとつの現れなのではなかろうか。これらの課題や仮説の検証に取り組むことで、千島アイヌの歴史解明に考古学がどこまで貢献できるか可能性を追求していきたい。

謝辞 本稿の作成にあたって、S. V. Gun'ko 氏 (カムチャツカ地方統合博物館長)、S. V. Grafskaja 氏 (同館主任学芸員) には資料調査を許可いただき、また調査結果の公表についても特段のご配慮を賜った。また、A. V. Ptashinski 氏 (カムチャツカ国立大学) には、博物館収蔵資料に関して詳細にご教示いただいた。このほか、右代啓視氏 (北海道開拓記念館) からは南千島の研究動向やカムチャツカのガラディンチェについて、Patricia Anderson 氏 (ワシントン大学) からはカムチャツカ半島の植生史や花粉分析について、加藤克氏 (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園) からはベルグマン・コレクションについてご教示を賜った。さらに、査読者の方々からは草稿の改善に役立つ建設的な指摘を多数賜った。お世話になった方々に、深く感謝申し上げる。最後に、貴重な資料をのこされた A. K. Ponomarenko 氏の長年にわたる

功績に敬意を表したい。同氏は、筆者が 2003 年にお会いしたのちほどなく中央ロシアに移住され、研究の第一線からは退かれたと聞いている。しかし、そのコレクションは今後もカムチャツカ半島の歴史研究にとっても、広義の千島アイヌ史の研究にとっても、なくてはならない存在でありつづけるであろう。

註

- 1) すでに筆者らが検討・報告した資料は、本稿の主たる検討対象にはふくめない (プタシンスキー・高瀬 2008, Takase 2013 など)。また、T. M. ゼコヴァ (Дикова 1983) と N. N. ゼコフ (Диков 1977, 1979) による発掘資料の再検討結果も今後別途まとめる予定があるため、やはり本稿の検討対象にはふくめない。
- 2) バリシャヤ・サランナヤ遺跡、リストヴェンニツナヤ遺跡などで、タリヤ文化期に相当する年代は報告されている (Пономаренко 1993)。しかし、内耳土器の年代は欠落しているか、明らかに古すぎる測定値が報じられており、妥当な年代を推定するための根拠とはならない。
- 3) 林 (1953:190) は、占守島北端の国端崎における発掘で「捺痕の浅い微縄文のある薄手の土器の一小片」が出土し、それは「能取式土器 (道東部の続縄文文化前半の土器群に相当 ... 高瀬註) の群類に属するものである」としている。したがって、占守島にも続縄文土器が分布する可能性はあるものの、量的な観点からみてきわめて稀な飛び地的な事例とみなさざるをえない。
- 4) <http://www.varldskulturmuseerna.se/en/> (2015 年 2 月 26 日閲覧)
- 5) 「古イテリメン文化」の用語の利用法やゼコヴァ (Дикова 1983) の結論は考古学的に導かれた結論というよりは、「カムチャツカにアイヌはいない」という政治的な前提が研究の諸条件を規定していた社会・時代において提示されたひとつの仮説ととらえたほうがよいだろう。
- 6) ポノマレンコ (Пономаренко 1985) は、ナルィチェヴォ期 (紀元後二千年紀) とタリヤ期 (紀元前 1 千年紀) のあいだにクロノツキー期 (紀元後一千年紀) を設定しているが、その実態は不明でポノマレンコ自身もその後の文献においてほとんど言及していない。たとえばナルィチェヴォ遺跡 1・2 号住居 (Дикова 1983) のように、紀元後一千年紀後半に相当する年代測定値はあるものの、遺構・遺跡の内容からみてこの事例はナルィチェヴォ期に位置づけるべき資料である。アヴァチャ遺跡を代表例とするようにタリヤ期の内容を示す事例は豊富であ

るにもかかわらず、クロノツキー期の物質文化複合はほとんど明確にはなっていないことから、筆者は編年上の段階としてのクロノツキー期は存在しないか、存在するとしてもクロノツキー半島周辺や半島中央部・西海岸などに限定されるもので、半島南部全体をカヴァーするものではないと考えている。なお、ナルィチェヴォ・タリヤ期の両文化層から出土するもっとも一般的な人工遺物はともに剥片であるが、前者では黒曜石とともにそれ以外の岩石（玉髄・チャート・頁岩・泥岩・シルト岩）が30～90%の比率で用いられているが、下位の文化層では良質な黒曜石が50～90%をしめている。タリヤ文化には土器は伴わず、ナルィチェヴォ文化期の内耳土器も遺物数としては石器よりもはるかに少ない。しかし、遺構がKS1を切っているか否か、および利用されている岩石の構成にもとづいて、おおよその時期判断は可能である。

- 7) もちろん海洋漁労や海獣狩猟をまったくおこなっていなかったと考えているわけではなく、カムチャツカ川の河口付近の集団は積極的に行っていたはずである。しかし、それでもカムチャツカ半島の沿岸部を全面的に利用するようなことはなかったと考えざるをえない。
- 8) これまで、ナルィチェヴォ文化の年代は銚頭や放射性炭素年代から15世紀にまでさかのぼる可能性が考慮されてきたが（宇田川 1989, 菊池 1989）、内耳土器に関してはおおよそ17世紀以降の比較的新しい時期に位置づける見解が支配的であった（辺泥・福田 1974, Диков 1979, Дикова 1983, 菊池 1985, 前田 1989, 宇田川 1989 など）。しかし、先述の筆者の研究によって（Takase 2013）、内耳土器もまた15世紀後半～17世紀前半に出現しており、この時期に北海道もしくはサハリンのアイヌからクリルが「分岐」したことが確実視できるようになった。いっぽうで、18世紀段階のクリル／千島アイヌは「精神的、社会的に完全にアイヌだった」（佐々木 2014:90）との民族誌にもとづく評価にあるように、また語彙の共通性にもみとめることができるように（中川 1996）、千島アイヌと北海道・サハリンのアイヌのあいだの共通性は18世紀以降においても相当程度維持されている。クリルの「分岐年代」が古くなっただけに、こうした共通性が維持されつづけた要因・機構の解明はこれまで以上に重要な課題となってきたことが自覚されるべきであろう。
- 9) A. V. ブタシンスキーからの私信（2014）によれば、かつてポノマレンコとともにクロノツキー湖北岸で調査した際、無文の土器片を表面採集したとのことである。当時、ポノマレンコの判断で、この資料はロシア人などに

よってもたらされた新しい時期に属する可能性が考慮され、報告されることはなかったという（所在は現在もお不明）。カザラン類型の土器がこの地域に分布するとは考えにくいため、筆者は内耳土器の可能性がもっとも高いと考える。同様に、一辺に出入口のある隅丸方形の堅穴住居が、切り合いをもたずに分布するありかたからみて、ナルィチェヴォ文化に属する可能性のある遺跡は、トレチヤ・レーチカ（Третья речка）、シュムナヤ I（Шумная I）などクロノツキー湾北部にも拡がっている（Пономаренко 1985）。出土遺物の詳細を検討することはできないが、将来的にこの地域もナルィチェヴォ文化の分布範囲に入る可能性は想定できる。

- 10) *Abies sachalinensis* var. *gracilis*, *Abies gracilis* が *Abies sachalinensis* の異名あるいは別種として用いられることもとくにロシアにおいて多いが、本稿では学名 *Abies sachalinensis*、和名トドマツに統一する。
- 11) このほか食用にもなるベリー類であるイワツツジ（*Vaccinium praestans*）も特異な分布をしめすことが指摘されている。すなわち、北海道島・サハリン島・南千島にくわえてカムチャツカ半島にも飛び地で分布し、しかもカムチャツカ半島内の分布はゴルィギナ川流域内の特定地点、バリシャヤ川河口、ナチキ湖周辺の3箇所であるとされてきた（Хоментовский 1985）。本稿でも言及したように、ゴルィギナ川流域では内耳土器の出土が確認されている。管見のかぎり、バリシャヤ川河口部では内耳土器の出土はまだ知られていないが、近隣のゴルィギナ川やヤヴィナ川では内耳土器が出土している。バリシャヤ川河口部では、流路のはげしい変化により遺跡が消滅している可能性もあるが、内耳土器の分布圏内にあることは確実である。ナチキ湖周辺でも内耳土器の確実な出土例はまだないが、この地域ではしばしば土器が表採されてきている（A. V. ブタシンスキー私信 2014）。先述のようなカムチャツカ半島南部における土器出土状況を考慮に入れると、それは内耳土器である可能性が非常に高い。このように、イワツツジの分布もナルィチェヴォ文化と密接な関係がありそうにみえるが、近年の知見ではカムチャツカ半島におけるイワツツジの分布はより広くなるらしい（Якубов и Чернягина 2004）。今後、詳細を確認したい。
- 12) カムチャツカ半島北部でも、ガラディシチェは15世紀代からすでに存在することが土器編年から解明されつつある（Takase 2014）。18世紀以降にはこの地域でもロシア人との激しい戦闘が行われるようになるが、ガラディシチェはコリャーク・アリュートル集団内部の闘争によってやはりそれ以前から存在していたようである。

引用文献

天野哲也, B. フィッツヒュー, V. シュービン (2007) 千島列島にオホーツク文化の起源を求めて. 高橋英樹・加藤ゆき恵・松田由香編「北大千島研究の系譜 — 千島列島の過去・現在・未来 —」: 60-66, 北海道大学総合博物館.

馬場 脩 (1937) 千島群島出土の狩猟具及び漁具. 民族学研究, 3(2), 295-337.

馬場 脩(1939a)考古学上より見たる北千島(一).「人類学・先史学講座 10」:1-107. [再録:馬場 脩 (1979)「樺太・千島考古・民族誌 3」:9-115, 北海道出版企画センター.]

馬場 脩(1939b)考古学上より見たる北千島(二).「人類学・先史学講座 11」:109-154. [再録:馬場 脩 (1979)「樺太・千島考古・民族誌 3」:117-162, 北海道出版企画センター.]

馬場 脩 (1940) 日本北方地域及び附近外地出土の「内耳土鍋」に就いて.「人類学・先史学講座 14」:1-104 [再録:馬場 脩 (1979)「樺太・千島考古・民族誌 3」:163-266, 北海道出版企画センター.]

Бобров, Е. Г. (1978) Лесобразующие хвойные СССР, Издательство «НАУКА», 188с.

Braitseva, O. A., Ponomareva, V. V., Sulerzhitsky, L. D., Melekestsev, I. V., Bailey, J. (1997) Holocene key-marker tephra layers in Kamchatka, Russia. Quaternary Research, 47 (2), 125-139.

Bronk Ramsey, C. (2014) OxCal 4.2.

チースリク, Н (1962) 北方探検記 — 元和元年に於ける外国人の蝦夷報告書 —, 42p, 吉川弘文館.

Диков, Н. Н. (1977) Археологические Памятники Камчатки, Чукотки и Верхней Колымы, 386с, Издательство «НАУКА».

Диков, Н. Н. (1979) Древние Культуры Северо-Восточной Азии, 352с, Издательство «НАУКА».

Дикова, Т. М. (1983) Археология Южной Камчатки в связи с проблемой расселения айнов, 230с, Издательство «НАУКА».

Dirksen, V., O. Dirksen and B. Diekmann (2013) Holocene vegetation dynamics and climate change in Kamchatka Peninsula, Russian Far East. Review of Palaeobotany and Palynology, 190, 48-65.

Егорова, И. А. (1980) Палинологическая характеристика вулканогенно-осадочных отложений в применении к стратиграфии. Вулканический центр: строение, динамика, вещество (Карымская структура) :52-76,

Издательство «НАУКА»..

Егорова, И. А. (1982) История развития растительности Камчатки в голоцене. Развитие Природы Территории СССР в плейстоцене и голоцене:220-223, Издательство «НАУКА».

Fitzhugh, B., V O. Shubin, K. Tezuka, Y. Ishizuka and C. A. S. Mandryk (2002) Archaeology in the Kuril Island: Advances in the study of human paleobiogeography and northwest pacific prehistory. Arctic Anthropology, 39(1, 2), 69-94.

Fitzhugh, B., S. Moore, C. Lockwood and C. Boone (2004) Archaeological Paleobiogeography in the Russian Far East: The Kuril Islands and Sakhalin in Comparative Perspective, Asian Perspectives, 43(1), 92-122.

林 欣吾 (1943) 最寄式内耳土器論考. 史前学雑誌, 14 (6), 1-28 [再録:林 欣吾 (1984) 新潟武彦編「千島・樺太の文化誌」:219-246, 北海道出版企画センター.]

林 欣吾 (1953) 日本北地の古文化と種族.「ロシア人日本遠訪記」:157-349, 内外社.

加藤晋平 (1979) カムチャツカ半島のごロディシチェ. 北海道考古学, 15, 89-94.

加藤晋平 (1980) チャシの成立をめぐる二, 三の問題 — シベリアとカムチャツカ半島 —.「北海道東部地区の遺跡研究」:139-156, 筑波大学. [再録:加藤晋平 (1985)「シベリアの先史文化と日本」:289-327, 六興出版.]

川上 淳 (1996) 十八世紀から十九世紀初頭の千島アイヌと千島交易ルート.「メナシの世界」:158-238, 北海道出版企画センター.

川上 淳 (1997) 文化年間のラシヨフ島アイヌの交易と鉄鍋・ラッコ皮. 根室市博物館開設準備室紀要, 11, 77-93.

川上 淳 (2011) 近世後期の奥蝦夷地史と日露関係, 488p, 北海道出版企画センター.

Хоментовский, П. А. (1985) Тысячелетняя роща. НОРД-ОСТ: 114-127.

Хотинский, Н. А. (1977) Голоцен Северной Евразии: Опыт трансконтинентальной корреляции этапов развития растительности и климата, 200с, Издательство «НАУКА».

Карпачевский, Л. О. (1968) Загадка природы или тайна истории? : Природа, 1968(3), 78-81.

菊池俊彦 (1985) <書評> Т.М. Дзюкова著『南カムチャツカの考古学 — アイヌの移住の問題と関連して —』. 北海道考古学, 21, 121-126. [再録:菊池俊彦 (2004)「デコヴァの南カムチャツカの古代文化研究」:193-204,

- 北海道大学図書刊行会.]
- 菊池俊彦 (1989) カムチャダルとアイヌ — その文化的交流 —. 日本シベリア学会報, 4, 4-10. [再録: 菊池俊彦 (1995) 「北東アジア古代文化の研究」: 348-357, 北海道大学図書刊行会.]
- 児島恭子 (1994) ラッコ皮と蝦夷錦の道. 「歴史の道再発見 第1巻」: 71-99, フォーラム・A.
- 児島恭子 (2003) 日本史のなかのラッコ皮交易. 大塚和義編「北太平洋の先住民交易と工芸」: 32-35, 思文閣出版.
- 小杉 康 (1996) アイヌの杓子, 物質文化, 61, 18-45.
- 小杉 康 (1997) 物質文化からの民族文化誌的再構成の試み — クリルアイヌを例として —, 国立民族学博物館研究報告, 21(2), 391-502.
- Krashennnikov, S. P. (1754) The History of Kamchatka and the Kurilski Islands, with the Countries Adjacent, 375p, American Classics Quadrangle Books.
- Kyle, P. R., V. V. Ponomareva and R. R. Schluepa (2011) Geochemical characterization of marker tephra layers from major Holocene eruptions, Kamchatka Peninsula, Russia. International Geology Review, 53-9, 10, 1059-1057.
- Недолужко, В. А. (1995) Конспект дендрофлоры российского Дальнего Востока, 208с, Дальнаука.
- Newhall, C. G. and S. Self (1982) The volcanic explosivity index (VEI): An estimate of explosive magnitude for historical volcanism. Journal of Geophysical Research, 87 (C2), 1231-1238.
- 前田 潮 (1989) 先史時代終末期のカムチャツカにおける「南北問題」. 北方言語・文化研究会編「民族接触 — 北の視点から —」: 290-297, 六興出版.
- 牧野富太郎 (2000) 新訂牧野新日本植物圖鑑, 1452p, 北隆館.
- 宮部金吾・工藤祐舜 (1986) 普及版北海道主要樹木図譜, 186p, 北海道大学出版会.
- 村崎恭子 (1963) 千島アイヌ語絶滅の報告. 民族学研究, 27(4), 51-55.
- Murayama, S. (1968) Ainu in Kamchatka. 九州大学文学部紀要, 12, 55-77.
- 村山七郎 (1987) クリル諸島の文献学的研究, 215p, 三一書房.
- 中川 裕 (1996) 言語地理学によるアイヌ語の史的探究. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要, 2, 1-17.
- 野村 崇・杉浦重信 (2000a) カムチャツカ半島ジュパノヴォ遺跡出土の寛永通宝. 出土銭貨, 14, 173-180.
- 野村 崇・杉浦重信 (2000b) カムチャツカ半島南東部ジュパノヴォ遺跡出土の日本製品. 北方博物館交流, 12, 27.
- Оглоблин, Н. (1891) Две сказки Вл. Атрасова об открытии Камчатки. Чтения в Обществе ве истории и древностей российских, Кн. 3, с.3-18.
- オークニ, S. D. (原子林二郎訳) (1943) カムチャツカの歴史, 238p, 大阪屋号書店.
- 大坂 拓 (2010) 千島列島中部出土続縄文・オホーツク土器の新資料 — 2007 年 KBP 調査出土土器の概要報告 —. 熊木俊朗・高橋 健編「千島列島先史文化の考古学的研究」: 61-74, 東京大学大学院人文社会系研究科.
- 沖津 進 (1996) サハリン南部に分布するエゾマツ — トドマツ林の植生地理学的位置づけと成立機構. 植生学会誌, 13, 25-35.
- 沖津 進 (2000) 北日本の主要な森林の北東アジアにおける植生地理学的位置づけ. 国士舘大学地理学報告, 9, 1-11.
- 辺泥和郎・福田友之 (1974) 北千島・パラムシル島発見の土器について. 北海道考古学, 10, 89-97.
- Phillips, S. C. 2011 Networked Glass: Lithic Raw Material Consumption and Social Networks in the Kuril Islands, A dissertation submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy, 235p, University of Washington.
- Пономаренко, А. К. (1985) Древняя Культура Ительменов Восточной Камчатки. 311с, Издательство «НАУКА».
- Пономаренко, А. К. (1993) Новые археологические памятники южной Камчатки и полуострова Лопатка (К Вопросу об Обитании Айнов на Южной Камчатке). Краеведческие Записки, 1993, 2-136.
- Пономаренко, А. К. (2000) Древняя Культура Ительменов Камчатки, 312с, Петропавловск-Камчатский.
- ブタシンスキー, А. V.・高瀬克範 (2008) ナルィチェヴォ 9 遺跡発掘調査報告書. Результаты раскопок на Нальчево-9 (2006-2007 гг.), 33 p, 国立カムチャツカ大学.
- 佐々木史郎 (2014) 鳥居龍蔵が出会った北方民族: 千島アイヌ. J. クライナー編「日本とは何か」: 78-96, 東京堂出版.
- 佐藤孝夫 (2011) 増補新版北海道樹木図鑑, 334p, 垂瑠西社.
- Schnell, I. (1932) Prehistoric finds from the island world of the Far East, now preserved in the Museum of the Far Eastern Antiquities, Stockholm. Bulletin of the Museum

- of Far Eastern Antiquities, 4, 15-104.
- Шамшин, В.А. (1999) Каменноберезовые леса Камчатки: биология, экология, строение древостоев, 170с, ГЕОС.
- Shnirelman, V. A. 2001 Strange customs: Incipient social differentiation in Kamchatka through the eyes of the first Russian explorers. Bulletin of the National Museum of Ethnology, 25(4), 625-640.
- Сокоров, И. А. 1973 Вулканизм и Почвообразование (на примере Камчатки), 228с, Издательство «НАУКА».
- 関口 明 (2013) 中世日本の北方社会とラッコ皮交易 — アイヌ民族との関わりで —. 北海道大学総合研究博物館研究報告, 6, 46-57.
- Steller, G. (1774) (translated by Engel, M. and Willmore, K. in 2003) Steller's History of Kamchatka, 298p, University of Alaska Press.
- 菅原繁蔵 (1937) (1975 再版) 樺太植物誌 I, 504p, 国書刊行会.
- 杉浦重信 (1998) 考古学より見た北海道・千島・カムチャツカ. 野村崇先生還暦記念論集編集委員会編「北方の考古学」: 511-540.
- 杉浦重信 (2011) カムチャツカ半島のイテリメンの階層社会について. 青山考古, 27, 129-143.
- 鈴木健治 (2013) 千島アイヌの石ランプ. 北海道考古学, 50, 151-166.
- 鈴木公雄 (1965) 「チャシ」の性格に関する一考察. 物質文化, 6, 31-41.
- Takase, K. (2013) Chronology and age determination of pottery from the southern Kamchatka and northern Kuril Islands, Russia. Journal of the Graduate School of Letters, 8, 35-61, Graduate School of Letters, Hokkaido University.
- 高瀬克範 (2013) 河野コレクション (旭川市博物館収蔵) の内耳土器. 北大史学, 53, 1-16 & 21.
- 高瀬克範 (2014) 失われた千島アイヌの来歴と生活誌を復元する. 知のフロンティア, 3, 6-7, 北海道大学.
- Takase, K. (2014) Radiocarbon dating of pottery from Karaga Bay Coast, Northern Kamchatka, Russia. Journal of the Graduate School of Letters, 9, 1-27, Graduate School of Letters, Hokkaido University.
- 高瀬克範・鈴木建治 (2013) 馬場コレクションの再検討 — 北千島の竪穴住居・土器・石器の基礎的研究 —. 北海道大学文学研究科紀要, 140, 1-56.
- 手塚 薫 (2007) 先史時代から接触期までの千島列島への人の移住. 「アイヌ文化の成立と変容 — 交易と交流を中心として —」: 301-326, 法政大学国際日本学研究所.
- 手塚 薫 (2010) 千島列島における先史文化の適応と資源獲得・流通の検討. 北海学園大学人文論集, 46, 73-95.
- Torii, R. (1919) Études archeologiques et ethnologiques: Les Ainou des Iles Kouriles. The Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo, XLII, 1-337 & 38 Plates. [翻訳再録: 鳥居龍蔵 (小林知生訳) (1976) 「鳥居龍蔵全集5」: 310-553, 朝日新聞社.]
- Турков, В. Г. и В. А. Шамшин (1963) Пихта на Камчатке. Леса Камчатки и Их Хозяйственное Значение: 297-312, Издательство АН СССР.
- 右代啓視 (1996) 千島列島採集の考古資料 — 長尾又六コレクション —. 根室市博物館開設準備室紀要, 10, 71-90.
- 右代啓視 (2000) 北東アジアにおけるチャシの起源と位置づけ. 「北の文化交流史研究事業研究報告」: 35-68, 北海道開拓記念館.
- 右代啓視 (2001) チャシの起源とその成立過程. 「知られざる中世の北海道 — チャシと館の謎にせまる —」: 18-28, 北海道開拓記念館.
- 宇田川洋 (1989) 北方地域の考古学的文化接触. 北方言語・文化研究会編「民族接触 — 北の視点から —」: 8-30, 六興出版.
- Васильевский, Р. С. (1961) Древняя Корьякская Культура. Вопросы Истории Сибири и Дальнего Востока, 321-327.
- Васильевский, Р. С. (1971) Происхождение и Древняя Культура Коряков, 221с, Издательство «НАУКА».
- Watson, W. 1965 Cultural Frontiers in Ancient East Asia. 187p and 103 Plates, Edinburgh University Press.
- Якубов, В. В. (2010) Иллюстрированная Флора Кроноцкого Заповедника (Камчатка): Сосудистые Растения, 296с, Биолого-почвенный Институт ДВО РАН.
- Якубов, В. В. и О. А. Черныгина (2004) Каталог Флоры Камчатки (сосудистые растения), Биолого-почвенный Институт, Камчатский Филиал Тихоокеанского Института Географии, РАН, 165с.
- 山浦 清 (1989) 考古学から見た北千島の文化的位置づけ. 北方言語・文化研究会編「民族接触 — 北の視点から —」: 298-308, 六興出版.
- ザヨンツ マウゴジャータ (2009) 千島アイヌの奇跡, 182p, 草風館.

Naiji Pottery from the Southern Kamchatka Peninsula and Its Implications for History of the Kuril Ainu

Katsunori TAKASE

Abstract

This study purposes to reveal historical changes in occupation area of the Kuril Ainu and their ancestral group “the Kurile” in the Kamchatka Peninsula. On the basis of typological examination of clay vessels in A. K. Ponomarenko’s collection preserved in the Kamchatka Krai United Museum, following conclusions were derived:

- 1) All pottery fragments from the Southern Kamchatka are Naiji pottery. It is safely to say that Naiji pottery is only pottery throughout prehistory and protohistory in this region.
- 2) Pottery types and their distribution demonstrate that Naiji pottery users occupied in a wide area from the Lopatka Cape to the northern coast of the Shipnskiy Peninsula on the east coast and from the Lopatka Cape to the Gorygina River basin on the west coast between the latter half of the 15th century and the 17th century. However, this area became rapidly small to an area from the Lopatka Cape to Vestnik Bay on the east coast around the beginning of the 18th century, while there was not large change on the west coast. In the begining of the 19th century, Naiji pottery users were likely to quite to occupy the Kamchatka Peninsula and started to live only in the Northern Kurils.
- 3) Naiji pottery can be regarded as an element of the Nalychevo Culture suggested by N. N. Dikov (1979). However, it is not a part of the Old Itel'men Culture as Dikov and Ponomarenko noted, because artifacts of the Nalychevo Culture indicate that it has a close relationship to the Kurile and the Kuril Ainu.
- 4) At archaeological sites of the southeastern coast of the Kamchatka Peninsula, sediment layers have a definite pattern from the ground surface to lower layers: surface layer - cultural layer(s) of the Nalychevo Culture period – black or dark brown sandy silt layer(s) – KS1 tephra layer (ca. 1800yBP) – cultural layer(s) of the Tar’ya Culture period. This suggest that KS1 from the Ksudach volcano gave a destructive impact to the Tar’ya Culture, and it enabled the bearers of the Nalychevo Culture to easily occupy this area between the 15th and the 17th centuries.
- 5) A large portion of the bearers of the Nalychevo Culture must be the Kurile or the Kuril Ainu documented in historical records. A sharp reduction of their occupation area in the beginning of the 18th century was likely resulted from changes in their resource/land use as an internal factor and active colonization by Russians as an external factor.

Keywords: Kamchatka Peninsula, Kuril Islands, Naiji pottery, Kuril Ainu

